

明日に生きる

—作文コンクール入選作品集—

第35号



令和6年度



東京都産業教育振興会

表紙デザイン

私たちの生活には、たくさんの人とたくさんの仕事が関係しています。この絵では、その繋がりを、一本の道として表現しました。食材には生産者が必ずいるし、建造物には設計者や建築した人が必ずいます。服もテレビも電車もすべてのものが人と人との繋がりで存在しています。誰かのおかげで生活できるすばらしさと感謝を、この絵から感じてもらえたらうれしく思います。

台東区立駒形中学校
3年 山崎 茉 紘

明日に生きる ―作文コンクール入選作品集― 第三十五号 目次

講評

作文選考を通じて

中学校の部

選考委員長（町田市立真光寺中学校長）

矢島 加都美

1

作文選考を通じて

高等学校・専修学校等の部

選考委員長（東京都立江東商業高等学校長）

智片 将也

2

中学校の部

最優秀賞

私が生きたい世界

国分寺市立第四中学校

三年 菅生 すみれ

3

優秀賞

私が母を尊敬した日

杉並区立井荻中学校

三年 土橋 里乃

4

優秀賞

私は今でもヒーローになりたい

国分寺市立第四中学校

三年 伊藤 旭陽

5

優秀賞

職場体験学習で得たもの

東京都立武蔵高等学校附属中学校

三年 島崎 花

7

佳作

体験して学んだありがたさ

文京区立第八中学校

三年 松岡 渚

8

佳作

今はもう怖くない

墨田区立両国中学校

三年 榮 煌愛

9

佳作

もの作りが私に与えてくれたもの

墨田区立両国中学校

一年 伊藤 彩愛

10

佳作

新しい職業観

大田区立大森第六中学校

二年 水谷 花帆理

11

佳作

動物に関わる仕事を目指して

世田谷区立尾山台中学校

三年 山内 弘桜

13

佳作

動物たちのために私ができること

中野区立中野東中学校

二年 三代 理菜

14

佳作

職場体験について

杉並区立泉南中学校

二年 野口 日茉莉

15

佳作

職場体験で学んだこと

杉並区立泉南中学校

二年 山本 あかり

16

佳作

私にとっての技術

北区立赤羽岩淵中学校

三年 川島 杏

17

ページ

ページ

高等学校の部

佳作	手作りすることで	北区立赤羽岩淵中学校	三年	中山まなみ	18
佳作	幸せ	北区立赤羽岩淵中学校	三年	吉澤宗易	19
佳作	職場体験を通して見つけた夢	葛飾区立亀有中学校	二年	小城蒼空	20
佳作	看護師になるために	葛飾区立高砂中学校	三年	熊田亜優美	21
佳作	私にとってのものづくり	江戸川区立小松川第二中学校	三年	新井陽菜	23
佳作	自分の性質を生かした働き方	調布市立第八中学校	一年	安田匠杜	24
佳作	いつか来る輝く未来	国分寺市立第四中学校	三年	三ツ矢香桜	25
佳作	夢への第一歩	国分寺市立第四中学校	二年	近藤百恵	26
佳作	私の夢	三宅村立三宅中学校	二年	長谷川豪	28
佳作	私の職業観	東京都立両国高等学校附属中学校	三年	鈴木可憐	29
佳作	和菓子の物語	東京都立両国高等学校附属中学校	三年	高田丹喜	30
佳作	都庁で学んだ働く意義	東京都立武蔵高等学校附属中学校	三年	栗村実世	31
佳作	自分の「好き」を将来の夢に	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	久下沼志織	32
佳作	失敗は成功の基	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	箕輪和真	33
最優秀賞	瑞穂わが学びの庭や	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	稲垣琥大	35
優秀賞	将来の夢	東京都立葛飾商業高等学校	三年	松崎由佳	36
優秀賞	人と心がつくるパティシエの世界	東京都立赤羽北桜高等学校	二年	野澤萌音	37
優秀賞	個人の努力とみんなの協力	岩倉高等学校	二年	鈴木将一	39

佳	作	夢	東京都立園芸高等学校	二年	小西昇潤	40
佳	作	フラワーロスを減らしたい	東京都立農芸高等学校	二年	石松花音	41
佳	作	畑から学ぶ	東京都立農業高等学校	二年	土屋風結	42
佳	作	植物バイオを学ぶ、そして活かす	東京都立農業高等学校	二年	渡辺智晴	44
佳	作	保育士になるために頑張りたいこと	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	五十嵐美月	45
佳	作	家庭科の先生	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	岡部凧沙	46
佳	作	私の憧れ	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	岡部友梨那	48
佳	作	大島高校農林科で学んだこと	東京都立大島高等学校	三年	木村琴音	49
佳	作	調理科で得たことと夢	東京都立赤羽北桜高等学校	二年	鈴木美亜	50
佳	作	夢への第一歩	東京都立赤羽北桜高等学校	二年	宮田彩希	51
佳	作	私の夢	東京都立赤羽北桜高等学校	二年	吉田彩乃	53
佳	作	寮生活と乗船実習から学んだこと	東京都立大島海洋国際高等学校	三年	辻井初芽	54
佳	作	海から学んだ未来への羅針盤	東京都立大島海洋国際高等学校	三年	古屋心渚	55
佳	作	高校生活での人生観の変化	東京都立大島海洋国際高等学校	三年	宮城武虎	56
佳	作	看護学生	愛国高等学校	三年	酒巻優華	58
佳	作	患者様との関わり	愛国高等学校	三年	南指原歩未	59
佳	作	助産師という私の夢	愛国高等学校	一年	松原ひなた	60
佳	作	人と人の繋がり的重要性	羽田国際高等学校	一年	立川彩乃	61
佳	作	人を笑顔にできる仕事	国際共立学園高等専修学校	三年	伊藤葉奈	63

専修学校の部

ページ

優秀賞 食を通じた誰一人取り残されない優しい世界を目指して

吉祥寺二葉栄養調理専門職学校 一年 島田佳絵

64

優秀賞 雲外蒼天

ハリウッド美容専門学校 一年 渡邊真衣

65

イラストの部

ページ

イラスト賞

台東区立駒形中学校

三年 山崎茉紘

66

表彰式の様子

令和6年度作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）

応募校数・応募者数・入選者数の推移

作文のテーマ別応募数の割合

令和6年度作文コンクール募集要項

令和6年度作文選考委員名簿

あとがき

67 68 69 70 71 73 74

作文選考を通じて

中学校の部 選考委員長

町田市立真光寺中学校長

矢島 加都美



今年度は、中学校の部に二十七校百七十八編の応募がありました。選考委員会で一次審査、二次審査を経て、入選作品を二十七編、その中から最優秀賞一編、優秀賞三編を選考いたしました。学校代表作品なので、どの作文も素晴らしく入選作品を絞ること、さらに最優秀賞、優秀賞を決定することは審査員一同とても苦労しました。

今回、最優秀賞を受賞した菅生すみれさんの「私が生きたい世界」は、職場体験の初日に「大人になるってどんなこと?」と質問され、その答えを見つげるためにも取り組んだ二日間。最終日、スタッフの方から「こんな世界で生きたい」でいいんだよとアドバイスをいただき、「世の中のすべては『思いを繋ぐリレー』だ」と気づき、「誰かを笑顔にできて、自分も笑顔でいられる世界で生きたい」という決意が伝わってきました。

優秀賞の土橋里乃さんの「私が母を尊敬した日」は、自分の母が「専業主婦」ということを友達に言えないでいた。調

理実習で、共働き家庭の友達がテキパキと調理をしていくのに、自分は何もできない。考えると、幼いころから、いつも食卓には食事が整えられ、行事や試合の時はお弁当を持たせてくれる母。父とは少し形が違うが家庭の立派な柱と気づき、「母のような人間になる」と綴っています。

伊藤旭陽さんの「私は今でもヒーローになりたい」は、幼いころの夢は「特撮ヒーロー」。成長するにつれ、夢は「特撮ヒーロー」の製作側になった。職場体験は映画館。想像以上にハードな仕事だったが、お客様との会話から「やりがい」を感じることで、「人々はみんなヒーロー。日常にヒーローはあふれている」自分もヒーローでありたい」と強い気持ちで結んでいます。

島崎花さんの「職場体験学習で得たもの」は、将来の夢は「医師」。職場体験学習の事業所は「病院」。楽しみに臨んだが、体験学習はリハビリ器具をつけたり、療法士さんのお話を聞いたり、言語療法士さんと一緒に患者さんのお世話をすることだった。「医師」の体験はできなかつたが、療法士さんたちのどんな患者さんにも優しく接している姿を見て、「患者さんから頼られる医師になりたい」と決意を強くした」とありました。

新型コロナウイルスも沈静化し、教育活動も活発に動き始めています。生徒たちの生き生きとした様子が作文から伝わってきて、頼もしいばかりです。

最後に「作文コンクール」に応募していただいた多くの生徒のみなさんありがとうございました。また、ご指導いただいた先生方、温かく見守ってくださいました保護者の皆様に感謝申し上げます。

作文選考を通じて

高等学校・専修学校等の部 選考委員長

東京都立江東商業高等学校長

智片将也



が多かったようです。

選考委員会では一次審査、二次審査を経て、高等学校の部では最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作十九作品、専修学校の部では、優秀賞二作品を選考させていただきました。

高等学校の部最優秀作品は、都立瑞穂農芸高校三年の稲垣琥大さんの作品で「瑞穂わが学びの庭や」です。この作品は、これまで愛情を込めて飼育してきた鶏をと畜、解体して食肉に加工する作業体験を描いたもので、自分の手で鶏を処理するさいに感じた、これまで育ててきた鶏への愛情とと畜することへのためらい、葛藤が描かれた作品です。

われわれの命は他の命の犠牲の上に成り立っていること、犠牲となった命の重たさ、犠牲となってくれた命に対する感

謝やその命の分まで生きていく誓いなど、生命に対する価値観についての描写が見事で、すべての選考委員から高い評価を受けた作品でした。

また優秀賞は、都立葛飾商業高校三年松崎由佳さんの旅行先で出会ったホテルマンの心温まるサービスを描いた「将来の夢」、都立赤羽北桜高校二年野澤萌音さんのインターンシップを通して学んだパティシエの技術やホスピタリティを描いた「人と心がつくるパティシエの世界」、岩倉高校二年鈴木将一さんの鉄道会社でのインターンシップで感じ得た、社員どうしのコミュニケーションの良さが生み出す企業の一体感を描いた「個人の努力とみんなの努力」の三作品でした。どの作品も甲乙つけがたく、仕事に対する憧れを自分の職業として実現するための思いがたいへん強く感じられる作品でした。

専修学校の部では、最優秀賞の選出はありませんでしたが、優秀賞は吉祥寺二葉栄養調理専門職学校一年島田佳絵さんの食品アレルギーをもつ方にも食を通じて幸せを提供したいという思いを描いた「食を通じた誰一人取り残されない優しい世界を目指して」、ハリウッド美容専門学校一年渡邊真衣さんのヘアメイクアップアーティストになる夢を描いた「雲外蒼天」の二作品でした。今回の応募作品は、目標に向かって様々な体験を積み重ね、自己実現につなげたいという思いを強く感じさせるものが多く、産業教育を学ぶ生徒・学生の熱い思いや逞しさを感じさせる作品ばかりでした。

結びに、今回の作文コンクールに応募していただいた生徒・学生の皆さん、ご指導に当たった先生方に深く感謝し、今後ますますのご活躍と専門高校・専修学校の発展を祈念いたします。

中学校の部 最優秀賞

私が生きたい世界

国分寺市立第四中学校 三年

菅生 すみれ

「大人になるってどんなことだと思う？」そう聞かれて、私はすぐに答えることができなかった。

私は昨年、職場体験でカフェを訪れた。緊張しながら迎えた初日、スタッフの方々が温かく迎え入れてくれた。三日間は流れるように過ぎた。食事が終わったテーブルを片付けたとき、私は嬉しくなった。残すことなく、綺麗に食べてくれたからだ。そのとき、思いを繋ぐリレーが続いているのだと気が付いた。食事を作った人から提供する人へ。そして食べる人へ。もし、食事をした人がカフェでの話を大切な人にしていたらさらに続いていく。きつとこのリレーは食材を作った人から続いているのだろう。私はそんな素敵なりレーに携われたことが嬉しかった。どんな仕事でも、たくさんの方が関わっている。そして、それが繋がって成り立っているのだと思う。私はこれをきっかけに、今まで以上に周りの人を大切にしようと思った。

あるとき、「注文いいですか？」と声をかけられた。私は一人で注文を受けたことがなく、怖くなってしまった。すぐにスタッフの方を呼びに行ったが、無言でその場を離れてし

まったことを後悔していた。「少々お待ちください」。こんなに簡単な言葉が出てこなかった。夜になっても頭から離れなかった。もし私があのお客さんの立場だったら。不安になったり、不快になったりするかもしれない。考えているうちに、言えなかった自分にだんだん腹が立ってきた。明日こそは言葉にして伝える。そう心に決めて私は眠りについた。

そして迎えた最終日。このカフェで仕事ができるのも今日が最後だ。この日も同じように、お客さんに呼び止められた。今度こそ。「ただいま伺います」。私は達成感と安堵の気持ちでいっぱいだった。やりがいを感じた瞬間だった。

「大人になるってどんなことだと思う？」最後のコーヒートを淹れていたとき、そう聞かれた。このカフェで過ごした時間が頭をよぎった。私は「大人になること」が想像できなかった。スタッフの方は笑顔で続けた。

「この職業に就きたいっていうのも素敵だけど、こんな世界で生きたいっていうのもいいんだよ。」

なんだか自分を見透かされた気分だった。私は夢がコロコロ変わる。パティシエになりたいと思ったこともあれば、テーマパークのキャストになりたかったこともある。幼い頃はそれで良かった。しかし今、将来のことを聞かれると、想像もできない先のことを具体的に答えなければいけない気がする。確かに大切なことだが、先のことなんてわからない。悩んでいるときにそう伝えてくれたのだ。

私はどんな世界で生きたいのだろうか。最初に思いついたのは「音楽に溢れた世界」。私は四歳から八年間ピアノを習い、中学校入学後は吹奏楽部でフルートを演奏している。大好き

な音楽に関係する仕事がしたい。厳しい世界だが、昔から憧れているのだ。そして、職場体験から約一年が経った今、私は胸を張って言える。私は、「誰かを笑顔にできて、自分も笑顔でいられる世界」で生きたい。私には今、一つの夢がある。一つはブライダル業界。誰かの幸せな瞬間を共にできて、一度きりの晴れ舞台で笑顔になってもらえる素敵な仕事だ。もう一つは音楽関係。諦めきれなかった。音楽の楽しさを伝えて、音楽を好きになってくれたら嬉しい。そして何より、大好きな音楽に関わることができるのだ。

将来のことなんて分からない。ブライダル業界で働いているかもしれないし、音楽の教員になっているかもしれない。今私が想像もできないような仕事をしているかもしれない。それでも今、私は「誰かを笑顔にできて、自分も笑顔でいられる世界」で生きたい。職場体験で最後にかけてられた言葉を私は忘れないだろう。そして私が大人になったとき、同じように誰かに伝えたい。「素敵な人生を。」



中学校の部 優秀賞

私が母を尊敬した日

杉並区立井荻中学校 三年

土橋里乃

友達と、両親の話になった時、多くの人が「お母さんも働いているよ。」と言う。「共働き家庭」と呼ばれる、夫婦共に働いている家族の形が増加しだしたのは、一八八〇年頃。二〇一五年頃には約六割を占めるようになったそうだ。だからなのか、自分の母親が専業主婦である事を告げると、驚いた顔をしてあれこれ聞いてくる。私の家では扉を開けると必ず「おかえり」という声が聞こえる。幼い頃から何一つ変わっていない。エプロンを着けてキッチンに立ち、料理をする母は、まるで魔法使いのようで私の憧れだった。そして、どこかの家庭でもそれが当たり前だと思っていた。

しかし、周りの人の話を聞く機会が増えると、共働き家庭の割合が多いことが分かった。それに伴って、私の中でも共働き家庭が当たり前という考えになってしまい、母への憧れは気付かないうちに消えていた。

そんな私の考えを変えてくれたのは、家庭科の授業だった。中学生になって、本格的に家庭科を学び始めてから私は、様々な話を聞き、多くの知識を身に付けてきた。その中で、一番私の考え方に影響したのは間違いなく調理実習だと思

う。新型コロナウイルスの関係もあって、中学生になってから初めての練習は二年生の三学期頃だった。初めてということもあってドキドキしていた。練習が始まると、そこには驚くような光景が広がっていた。多くのクラスメイトが慣れた手つきで食材を扱っていたのだ。その日の課題は生姜焼きだった。私は、何から手をつけて良いのか分からず、同じ班の人を見ていることしかできなかった。どうして料理ができるのか気になった私は、クラスメイトに聞いてみた。するとその人は「親が二人とも仕事の時は、自分で夜ご飯を作るからかな。」と言っていた。自分でご飯を作るなんて可哀想だと一瞬思った。けれど、よく考えみると、周りの人は少しずつ自立しているのに、自分は中学二年生にもなってもともに料理をしたことがない。今まで何をしてきたのだろうかと急に恥ずかしくなった。今思えば、幼い頃から当たり前のようにご飯がテーブルに並んでいた。学校の遠足の時も、部活動の試合の時も必ずお弁当を持たせてくれたのは母だった。もともと用意された食材やレシピがあっても何もできなかった私と比べて、母は毎朝起きてすぐに朝食を作る。そして、学校の給食とのバランスも考えながら一から献立を考えて、料理をする。また、家庭内のお金のこと考えながら買い物へ行く。きっとそれは、私が想像しているよりも、何倍も大変なことだと思う。しかし母は、それを「専業主婦という職」に就いたその日から、ほとんど休みはなく行なってきたのだろう。

今までは、学校で学ぶ教科の一つとしてしか見ていなかったが、そんな家庭科の授業から私は「当たり前」について考

えることができた。それぞれの家庭が「当たり前」をつくっていると思うが、私の家の「当たり前」はとても素敵なものであった。この「当たり前」は「やってあって当たり前」という意味ではなく「当たり前のことだから安心してね。」という一種の愛情だと思う。その当たり前という名の愛情は家族全員によって作られているのだと思う。だから、私も同じように当たり前という名の愛情を育んでいきたい。

今、「私のお母さんは専業主婦だよ。」と言うのは全く恥ずかしくない。むしろ、誇らしい。外で働いている父とは少し形が違うが、家庭内の柱として支えてくれてる母はかっこいい。そして、私はそんな母に憧れ、それ以上に尊敬している。家庭科の学習を通じて私には「いつか母のような人間になる」という人生の目標ができた。

私は今でもヒーローになりたい

国分寺市立第四中学校 三年

伊藤 旭陽

私は幼い頃から特撮ヒーローが好きだ。幼少期は悪者を倒す正義のヒーローの姿に憧れを抱き、自分もいつかあんな風に世界を守るヒーローになりたいと思っていた。成長するにつれ特撮ヒーローが現実世界にはないフィクションだと認識していった。その頃には、自分がヒーローになるという夢は持てなくなっていたが、好きだという気持ちに変わりはな

かった。周りの友人には「中学生でまだ特撮ヒーローが好きなの？」と言われたこともある。それでも、自分のこれまで生きてきた人生で特撮ヒーローの物語から学ぶことや、辛い時にヒーローの台詞に背中を押されることが何度もあり、自分にとって欠かせないものとなっていた。次第に興味は脚本や撮影方法、世の中の動きと関連したモチーフや物販、制作側へと深くなっていた。将来は特撮ヒーローを制作する側の人間になりたい、という夢を描くようになった。

ちょうどそんな時、中学校の職場体験が行われることとなった。職場体験先を選ぶ際、真っ先に目に飛び込んできたのは映画館での仕事だった。特撮ヒーローは映画としても数多く作品を残している。制作会社が作った映画を放映し、お客様が足を運ぶ場所。将来特撮ヒーローを制作する夢を持つ自分にも、映画館での職場体験は大きな意味があるのではないかと考えたからだ。

映画館での職場体験は、放映前の映像確認、入場口のチケット確認や館内案内、館内清掃、ポスターの貼り替え作業、4Dシートの匂い玉交換など、これまで客側として利用していた時には知り得なかった業務がたくさんあった。いくつもスクリーンがあり上映時間が違う。そのため、分単位であちこちに移動し、その間もおお客様の対応をしなければならぬ。ほとんどが立ち仕事で想像を超えるハードワークに感じた。

そんな忙しい業務の中で、一番印象に残ったのは、映画終了後のごみ回収をしている時だ。お客様が私に向かって「面白かったです。」や「ありがとうございます。」と声をかけてくださった。驚きと喜びで思わず大きな声で「ありがとうございます。」

ございました！」と返し、自然と満面の笑顔になっていた。その時、それまでの業務の中で一番働くことの「やりがい」を感じた。立ちっぱなしで痛かった足のことも忘れ、心が躍るような気持ちになった。その映画を制作したわけではない自分に向けられた感謝の言葉を聞き、自分も映画に携われたような誇りと、誰かの役に立つことができた喜びを感じることもできた。

職場体験を通して、世の中は目に見えないところでたくさんの方が関わり、支え合って社会が回っているのだと学ぶことができた。映画館はお客様と制作会社をつなぐ場であり、制作会社が作り上げた作品を万全の環境でお客様に届けている。お客様の反応や喜びの声を直接聞くことができるのも映画館だ。私が将来特撮ヒーローの制作に携わることができた時、映画館での職場体験が生かされ意味をもつと思う。この体験を思い出し、全ての関係者に感謝と尊敬の気持ちをもって仕事に取り組みたいと思う。そしてこの体験は、映画館の仕事だけでなく、世の中は支え合いの中で成り立っていて、どんな職業にも感謝と尊敬をもって生きていくべきであることを教えてくれた。

幼い頃に抱いた、ヒーローになりたいという夢は成長と共にもたなくなつた。しかし、職場体験を経験した今、誰かのために働く人や支え合っている人々は皆がヒーローだと感じることができた。日常にヒーローはあふれている。これから生きていく上で、私も常に誰かのヒーローでありたいと心から思う。

職場体験学習で得たもの

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年

島 崎 花

医師とはどのような存在であるべきなのか私は最近このことを度々考えていて、先日の職場体験学習ではこの問いのヒントを得ることができた。

私の幼いころからの将来の夢は医師になることだ。私の学校では中学校二年生の秋に職場体験学習が行われる。私ももちろん、病院での実習を希望したのだが、果たしてその通りになった。私は医師の仕事を経験できることがとても嬉しく、職場体験学習の日を首を長くして待っていた。

しかし、いざ職場体験学習が始まってみると、院長は私たちに「リハビリのお仕事を体験してもらいます。」と告げた。私は医師の仕事を体験できるとばかり思っていたので、とても残念に思った。

職場体験学習一日目は、リハビリ器具を実際に体験したり、療法士の方のお話を聞いたりした。色々学ぶことが多かったが、やはり医師の仕事をしたかったという思いは拭いきれなかった。

二日目は、言語聴覚療法士の方の仕事を見学した。そこで私は大事なことを学んだ。言語聴覚療法士とは言葉や食事についてのリハビリを行う人のことで、入院している人のご飯を考えたりするのも彼らの仕事である。実習先の病院には多

くの患者さんがおり、寝たきりの状態の患者さんも少なくなかった。そのような人たちにご飯を食べさせたり歯磨きをしたりする療法士の方について行き、仕事を見学させてもらった。

私たちはまず、療法士さんと共に寝ているおじいさんのベッドに向かった。ベッドはカーテンで仕切られていた。カーテンを開けて入るとき療法士の方は「おはようございます。」と元気に声をかけた。歯磨きを始めるときも、「歯を磨きますね。」と声をかけた。おじいさんはずっと寝たまま決して目を開けることも話すこともなかった。しかし、療法士の方はずっと声をかけ続けていた。私はその姿を見て不思議に思った。眠っているから声をかけても届かないのに、と。

次に、ご飯を食べさせてもらったり、歯磨きをしてもらったりすることをとても嫌がるというおばあさんのところへ行った。そのおばあさんは何をしてももらっても、「痛い」「嫌だ」とずっと言っていた。私は流石に言語療法士の方でも気分を害するのではないかとハラハラ見守っていたが、他の患者さんに接するのと同じように、笑顔で優しく声をかけながら仕事を続けていた。

ただ与えられた仕事をこなすだけならば、眠っている患者さんに毎回声をかけ、嫌がっている患者さんに笑顔でいる必要はないだろう。しかし、どんな人にも優しく、その人の立場になって考えることこそ、医療従事者に求められることなのだ。私は気付いた。結局、職場体験学習で医師の仕事を体験することはできなかった。しかし、働く上での心構えを学ぶことができた素晴らしい期間であったと感じた。

厚生労働省が定める医師法には、「医師は医療及び保健指導を掌ることによって公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もつて国民の健康な生活を確保するものとする。」と書かれている。職場体験学習を終えて、医師は、けがや病気に苦しんでいる人を治療し、その回復を促すだけでなく、患者さんに真摯に向き合い支える存在となる必要があることに気付かされた。

私は医師になりたい。この夢は今も変わらないが、職場体験学習で出会った一人の言語療法士さんのように優しくも真剣に一人一人の患者さんと向き合い、患者さんから頼られる医師になりたいと、今は思っている。

中学校の部 佳作

体験して学んだありがたさ

文京区立第八中学校 三年

松岡 渚

私は、中学二年生の七月にコンビニエンスストアで職場体験をしました。中学生なのでアルバイトの経験はなく、初めて店員さんたちと一緒にコンビニエンスストアの業務の一部を担うことができたのは貴重な経験になりました。日常で、私がコンビニエンスストアを利用するときには、お菓子、おにぎり、お茶などをよく購入しています。そのため、コンビニ

エンスストアは食品を販売しているイメージが強かったのですが、職場体験をしてみると、食品の販売をひとつの例として、見栄えを良くするフェイスマップという販売のための工夫があることがわかりました。インタビュをする地域の記事があるときは、おにぎりやお茶を多く発注して、より利益を得られるような工夫がされていました。忙しい地域の人たちのために、お弁当や食品を提供し、サービスを充実させることで、社会貢献をしていることが付きました。また、天候を考慮して、雨具を多く注文することや七月の暑い季節に人々が食べやすい食品を入荷する工夫をしていることに驚きました。売れ残りの食品が増えることはフードロスにつながり、資源の無駄遣いになります。持続可能な社会を目指すことを目標としている世の中で、フードロスは大きな社会問題です。一店舗の過去の販売実績に基づいた商品の情報分析を行うだけでなく、多くの店舗から収集したデータを分析することで、利益の向上につながっていることを知ることができました。私も情報処理やデータの解析に興味をもっていたので、職場体験での経験が将来の進路を決めるとき役に立ちそうです。

一方で、デジタルデータ解析に基づく商品販売ではなく、商品を紹介するポップ作り体験をしました。情報に基づく解析でなくて、自分が伝えたい魅力をポップに書くことができると、楽しい作業の一つでした。私はアイスクリームの紹介のポップを書きました。子どもたちからよく食べていたアイスだったので、気持ちを込めて書くことができました。紹介した商品が売れていると販売に貢献できてうれしく思い

ました。また、コンビニエンスストアは早朝から深夜まで商品を販売し、公共料金の支払いまで行うことができます。生活が不規則な人たちの暮らしを支え、地域のコミュニティの場所になっていることに気が付きました。これまでの自分自身の経験から、コンビニエンスストアが自宅の近くにあるだけで、困ったときにすぐに商品を購入することができ、何度も助けられました。また、塾の短い休憩時間の時に、コンビニエンスストアでおにぎりを買って空腹をしのいだこともありました。私たちが便利な生活を送ることができているのは、近所に多くの店があり、社会生活が成り立っていることに改めて気付かされました。アルバイトができる年齢になったら、職業経験を積み、自分の好きなことや得意なことを見つけて、自分に適した職業を探していきたいです。職業体験は経験の少ない中学生の私たちにとって、社会体験ができる貴重な体験でした。

今はもう怖くない

墨田区立両国中学校 三年

榮 煌 愛

「将来の夢は何ですか。」

私はその質問をされるのが怖かった。入塾の際の面接であつたり、よく怪我をした時にお世話になる接骨院だったり、将来の夢について聞かれる機会が増えた。小学校低学年のころはパティシエや料理人などコロナと夢が変わっ

ていたものの、心の底から叶えたい夢があつた。でも、学年が上がるにつれて私は自分の本当にしたいことがわからなくなつた。なんとなく昔からそう答えていたから、というのが理由でその響きに輝きがない。ただ文字として認識するだけだ。それでも中学校では、自分の進路について考えて選択していかなければならない。

中学校三年の進路学習で自己PRカードの存在を知つた。その第三項目に高等学校卒業後の進路についての欄があつた。そこでは、将来の夢や目標について具体的に明記しなければならぬようだ。中学生なのに高校卒業後の進路についてまで考えなければいけないことに驚いた。確かに、先を見通して物事を考えることは大事だ。でも、私の後先考えずに突っ走ってしまう性格では、将来の見通しを立てることは難しく不安でいっぱいだった。しかし、中学校に入つて一番と言つても過言ではない決断をしたことで、私は少しだけ変わった気がする。

それは、今の私が生徒会役員を務めていることだ。今まで誰にも話したことはないが、私が生徒会に立候補しようと思つた理由の一つは今の自分を変えたいという思いがあつたからだ。生徒会について何も知らなかつた当時の私は、生徒会役員は自分とは住む世界が違う人、学校を支えてくれている人、というイメージしかなかった。でも、その世界に飛び込んだら何か新しいものが見えるのではないかという期待と好奇心から挑戦した。今思うとこの決断は正しかつた。充実した学校生活のために取り組みについて案を出し合つたり、自分たちの学校の課題と現状について

の改善策について話し合ったりする上で、物事をあらゆる角度から見られるようになった。その際に生じるメリットやリスクについても考慮できるようになった。そして、友達にも「本当、生徒会好きだよな。」と言われるほどに、生徒会活動に誇りをもっている。

先のことについて少し見通しが立てられるようになっても、やはり具体的な目標と言われると難しい。そんな時、昨年の職場体験について思い出した。私の職場体験先は老人ホームだった。たくさんお話をしたことを覚えている。老人ホームと聞くと、体力が衰えて介護をしてもらう人がイメージしていた。でも、そういう人だけでなく、楽しくお話をしたり、レクリエーションをしたりとメキメキと生命力を感じる人もたくさんいた。そこで、私はこの笑顔と生命力を守りたいと思った。命はやがて尽きてしまうけれど、諦めないで自分が楽しいと思うことをしてほしい。だから、直接守るといふより、その環境を提供できる会社を起業して力になりたい。簡単なことではないことはわかっている。大きな口を叩いているようにも聞こえるかもしれない。それでも、チャレンジしたい。今はAIの技術は進歩してきて、将来はAIができることが増えてくる。でも、人間とロボットの違うところは心の有無である。人と人との繋がりをもるに感じられるこの仕事はきつと無くならないだろう。

私はもう、いつ誰に将来の夢を聞かれてもはっきりと答えられる。漠然とした回答ではなく、心の底から叶えたい夢を。今はもうその質問が怖くない。

もの作りが私に与えてくれたもの

墨田区立両国中学校 一年

伊藤彩愛

「ぴったり。ありがとう、おばあちゃん。」

中学校入学式の数日前、私は届いたばかりの制服を試着した。小柄な私には、一番小さいサイズでもスカートがブカブカだった。そこで、私はいつものように祖母にお願いして、制服のサイズを調整してもらった。

私は、小さい頃から「もの」を作ることが大好きだ。折り紙を使って立体の花や飾りを作ったり、画用紙を使って、仕掛けのあるカードや箱を作ったり。そんな「もの」作りの中でも私が一番好きなこと、それは手芸だ。私がこんなにも手芸を好きになったきっかけは、祖母の存在だ。祖母は手芸がとても上手だ。服のサイズを直したり、編み物でバックやポーチを作ってくれる。刺しゅうも得意で、特に私のお気に入りにはカラフルな草花の刺しゅうだ。

四年前、新型コロナウイルスがまん延した当初、世の中の大人が品薄になったマスクを手に入れるため東奔西走していた時、祖母は私たち兄弟が赤ちゃんの頃に使っていたガーゼやベビー服を使って素敵な手作りマスクをいくつも作ってくれた。かわいなお気に入りのマスクをつけて過ごせたことは、制限が多く憂鬱な毎日の中で、楽しみをつくり出してくれた。そして何より、私たちのことを思う祖母のぬくもりを感じた。

手作りだからこそ得られた感覚だ。

暇さえあれば紙やはさみ、裁縫道具を出し、何か作っていた私。他のことは考えず、目の前の道具と材料に集中し、完成図を思い浮かべ、ひたすら手先を動かす。時間を忘れて没頭する。そして完成した時の達成感と喜び。他に替えることのできない感情だ。「もの」作りの時間は、私の「心の居場所」になっていた。

しかし、中学校生活が始まって、その日々の忙しさに驚いた。勉強は、とても難しく様々な科目の課題は、少し油断すると、どんどんたまっていつてしまう。部活動に習い事、そして勉強。どれも手を抜きたくない私は、全てを完璧にこなしたいと考えていた。加えて、登校時間わずか徒歩三分だった生活から一転、私の家から中学校まではバスを使って十分かかる。私には、時間と心の余裕がなくなってしまった。生まれてから感じたことのない気持ちと疲れが私の心を埋め尽くしていった。

そして、そんなある日の夕食中、私の心は爆発を起こしてしまった。プレッシャーや疲れが積み重なり、新しく出会ったたくさんの友達や毎日乗らなければならぬバスにも常に緊張していた。自分の気持ちを言葉で表現することができず、涙が次から次へあふれ、声をあげて泣いた。突然のことに驚いた母が、私の気持ちのふたを次々に開いていった。何が辛いのか、何に疲れているのか。そして、私の心がグラツとゆるる、この質問を投げかけた。

「じゃあ、彩愛は今、一番何をしたい？」

私は無意識の内にこう答えていた。

「工作したり、お裁縫がしたいよ。」

「それが一番彩愛の好きなことなんだね。」

母の言葉で、私は忙しさの中に置き忘れてしまっていた、本当に自分の好きなことをはつきりと思い出した。

私は「もの」を作ることが大好きだ。自分で考え、手先を使い、作品を作り上げる。作っている時の集中力、完成した時の達成感。そして、完成品を見てもらえた時の喜び。その全てに私の大好きな気持ちが集結している。

スマートフォンやパソコン、機械で何でもできてしまう世の中だが、やはり、私は人の手で作られた「もの」が大好きだ。作り手の思いやぬくもりが、見る人や使う人に直接伝わるからだ。勉強やスポーツにも今まで通り全力を傾けつつも、自分の大好きな「もの」を作る時間も大切にしながら、これからの中学校生活を充実させていこうと考えている。

新しい職業観

大田区立大森第六中学校 二年

水谷 花帆理

今年も二年生職場体験の時期になり、希望アンケートが取られた。体験先を決める上で、興味のある分野は色々あったが、特に警察に関心があったので、公共機関を希望した。結果、残念ながら警察ではなく全く予想外である私たちの学校図書館だった。職場体験というと、外の世界に自分たちでア

ポイントメントを取り、少しドキドキしながら体験学習をするイメージだったが、あまりにも身近な場所で驚いた。しかし、学校図書館での仕事について考えることがあまりなかったのも、この機会に学んでみたいと思った。

一日目は書架整理などの作業を行うだけでなく、学校図書館の意義、役割についても学んだ。二日目や三日目も書架整理はもちろんのこと、おすすめ本の紹介や展示、ポップ作りを行った。先生は隙間時間などのちよつとした時間でも書架整理を怠っていなかった。私たちが利用する際にいつも本が正しい位置にある理由が分かった。そんな先生の姿を見て、目の前の仕事をこなすことも大切だが、常日頃から本棚や利用する人にも目を配り、視野を広げて仕事をすることも肝心な部分であると感じられた。

一緒に働く仲間には、昨年中国から来たばかりのクラスメイトもいた。休み時間に本を探していたが、図や写真を見ればわかるような日本語の少ない本を読んでいた。その様子を見て、学校には日本人が外国語を学ぶ本は多いが、外国人が日本語を学ぶ本が少ないことに気付いた。様々な事情により外国から日本の学校に通うことになることもあるのだから、日本の学校にも外国人が日本語を学ぶ本が必要だと感じた。きつとこの仲間と共に過ごしていなければ気付けないようなことだったと思う。

また、授業に使う本を探しに、三年生がクラスで図書館を利用しに来たこともあった。多くの利用者に目を配り、本を探すサポートをすることや、利用後の書架整理も含めて、果てしない大変な作業だと実感した。職場体験はたったの三日

間だったけれど、実際に働くとその仕事を知ることができるだけでなく、働くことそのものについても考えることができた。どうすれば一人でも多くの人に本を手にとってもらえるのか、みんなが利用しやすい学校図書館には何が必要なのか等、無意識のうちに考えるようになった。今回の短い間では体験しなかったが、この仕事をしていけば新しい本を導入する機会もあると思う。選べる本の種類や数が限られていく中で、どの本を選ぶことが一番良いのかを考えたりすることも、やりがいがありそうだ。

もともと仕事をすることにあまりプラスなイメージはなかった。もちろん仕事にもよると思うが、大抵の場合長期休みはなさそうで、友達ができなさそうであり、失敗するとても怒られる印象で、楽しくなく、生活するためのお金を稼ぐという認識が強くあった。今回の体験で、誰かのためになるように、いつもたくさん考えて工夫して追求できることはとても楽しく、私のやりがいとなっていると身にしみて感じた。これは学校図書館の司書の仕事に限ったことではないと思う。働くことは、お金を稼ぐためだけでなく、もっと大切な意義があると学んだ。仲間と共に作業ができたのも楽しかった。体験という立場だったというのもあったかもしれないが、上司にあたる司書の先生にとっても親切に指導していただいて、仕事に対するイメージが少し好ましくなった。普段当たり前のように使っている学校図書館だったけれど、職場体験を通して、いつも司書の先生がどのような仕事をしているのかを見て、実際に体験したこと、同じ学校図書館なのに、なにかとてもありがたい場所のように感じた。だから

ら、その後私は本を五冊借りた。

動物に関わる仕事を目指して

世田谷区立尾山台中学校 三年

山内 弘 桜

私は小さいころから動物が好きでした。生まれた頃から家に猫や亀がいたからかもしれません。小学校で飼育委員を二年間やってから、将来は動物に関わる仕事がしたいと思うようになりました。

夏休みに動物科のある高校を訪問し、体験授業を受ける機会がありました。体験授業の内容は、動物の飼育の手伝いや昆虫標本作り、動物科での授業の話などでした。

飼育の手伝いでは、まず飼育に関する基本的な知識を学びました。私が担当したのはフクロモモンガでした。五匹のフクロモモンガは昼間おとなしく、先輩方は一目で個々の見分けがついていました。専用の餌をやり、ゲージの掃除や日誌をつけたりしました。

訪問した高校には十種類以上の動物がいて長期休みも交替で世話をしているそうです。動物を飼うことは、単に可愛がるだけではなく、動物の健康や生活環境を整えることが重要です。動物の種類や個々の特性を理解し、必要な食事や運動量、環境を守ることがとても大切だと知りました。私たちが飼う動物の命を守っているという責任をとっても強く感じまし

た。

昆虫標本作りも、命の重みを感じる貴重な体験でした。標本にするトンボは先輩方が前日に学校内の林で採集して、冷凍保存されていたそうです。昆虫は小さな存在ですが昨日まで元気に飛んでいた命です。かわいそうな気持ちになりましたが、標本を作る過程で昆虫の種類や生態を研究するためだと学び、命の重さと重要さを再認識しました。

動物科の授業の話で驚いた話がありました。一年生のとき卵から羽化したひよこを育て、二年で鶏を飼育して、三年になつたら鶏を解剖して研究するそうです。

毎日餌をやり、健康状態を観察し、大切に育てていた鶏を最終的には自分たちの手で命を終わらせることは、とても難しく悲しいことだと思えます。でも私は鶏のから揚げも照り焼きも大好きです。私たちは毎日命を頂いて生きているのです。命に対する敬意と感謝を持たなくてはいけないと思います。たった一日の体験でしたが、命の大切さや責任について具体的にたくさん学ぶことができました。動物科のある学校に入ってもっと学びたいと思いました。

将来、動物に関わる仕事に就くことはとても大変であるというお話も聞きました。小学生のころ憧れていた動物園の飼育員はとても狭き門だそうです。飼育員の他にも動物に関する仕事は色々ありますが、専門的な知識、資格、技術などたくさん学ばなくてはならないとわかりました。

動物は私たちの生活に欠かせない存在で、人間は動物と深く関わり、大切にしなければならぬと思います。動物の命の重みを感じながら、動物たちと向き合い、寄り添って、動

物にとって信頼できるパートナーとなれるよう努力し、色々なことを学んでいきたいと思えます。

動物たちのために私ができること

中野区立中野東中学校 二年

三代 理菜

私は将来、保護犬に関わる仕事をしたいと考えています。この夢をもつようになったのは、小学生の頃の経験や、その後知った動物たちの現状がきっかけです。

小学校六年生の時、私はハムスターを飼っていました。最初はとてもかわいがっていて、一生懸命お世話をしていましたが、次第に忙しくなり、十分に世話をする時間が少なくなっていました。その結果、ハムスターが体調を崩し、最終的には死んでしまいました。私はその時、もっとちゃんとお世話をしていればよかったと深く後悔しました。この経験を通じて、動物を飼うことは大きな責任が伴うことを学びました。

その後、動物についてもっと知りたいと思い、調べていく中で、日本ではたくさん犬や猫が捨てられ、その多くが保健所で殺処分されていることを知りました。また、悪質なブリーダーが犬を商品として扱い、劣悪な環境で繁殖させていることにもショックを受けました。こうした現実を知り、私は「自分に何かできることはないか」と考えるようになりま

した。

今、私が目指しているのは、保護犬たちが安心して過ごせる施設で働くことです。具体的には、捨てられた犬たちが新しい家族と出会う手助けをしたり、保護犬が新しい環境に慣れるためのトレーニングを行ったりすることに関わりたいです。また、無責任なペット飼育を防ぐため、飼い主としての責任や必要な知識を学んでもらう活動にも取り組みたいです。これらの活動を通じて、少しでも多くの犬たちが幸せに暮らせるようになればいいなと思っています。この夢を実現するためには、まず動物についての勉強をしっかりと行うことが大切だと思います。動物福祉に関する本を読んだり、動物保護団体の活動に参加したりして、知識や経験を積み重ねていきたいです。また、動物愛護活動に取り組んでいる人たちとつながりをもち、協力しながら、保護犬たちのためにできることを増やしていきたいです。

私がこの夢をもつようになったのは、動物たちが苦しむことなく、安心して暮らせる社会を作りたいと強く思うからです。私にできることは小さいかもしれませんが、それでも何か力になりたいと考えています。これからも、自分ができることを一つずつ積み重ね、いつか保護犬たちが幸せに暮らせる施設で働けるように努力していきたいです。そして、将来は、自分の施設をもって、もっと多くの犬たちが幸せになれるように貢献できるようになりたいです。また、私が感じているのは、動物たちが安全に暮らせる場所を作るだけでなく、人と動物が互いに理解し合える社会を作りたいということです。動物は言葉を話すことができない分、私たちがその気持ち

ちを理解し、正しく接することが大切だと思います。動物たちが安心して暮らせるように、私たちがどうすればいいのかを考え、その思いを広げていくことが、私の目指すべき道だと感じていきます。

これからも、動物たちのために何ができるかを考え続け、知識と経験を積み重ねていきます。そして、将来は自分の施設をもち、多くの動物たちが幸せに過ごせる場所を作ることができるよう、努力を惜しまず進んでいきたいです。

職場体験について

杉並区立泉南中学校 二年

野口 日茉莉

私は今回の職場体験の中で、三つ学んだことがあります。一つめは、どんなときも笑顔を大切にすることです。お客様の笑顔を守るにはまず自分が笑っていることが重要だと感じました。自分の担当するお客様には笑顔をややしてほしくないのです、まずは自分が一番に楽しむことが大切だと感じました。

二つめは、ビジネスマナーの重要性についてです。なぜかというところ、どのような職業に就いても必要となるものだというところ、容姿だけではなく、話し方や、身の回りの整理整頓などのお客様の信用に関わるためです。

三つめは大切な物を預かる責任の重さです。銀行では、お

客様が銀行側を信用しているからこそお金を預けています。それを目の当たりにしたとき、自分にはお金の管理は難しいと感じました。なぜなら、なんの責任感もなく、軽い気持ちで大金を見てしまったからです。弱くてまだ能力の低い中学生の軽い気持ちで見えるものではなかったと個人的に感じています。そして、私たちは特別に、一億円や、小銭のみの十万円などの大金を手で持たせていただきました。一億円は約十キログラム。私には両手で持つても足がすぐむほどの重さでした。大金を持たせていただいたとき私は、物理的にも精神的にもお金の重みを感じました。

私には数年前から、メイクアップアーティストになるという夢があります。今も変わらず追い続けている夢です。幼少期からメイクアップが好きでした。小学四年生くらいまでは趣味程度にやっていたのですが、小学校高学年になるにつれ、メイクアップをする頻度が増え、自分が一番好きな事だと気づき、仕事にしたいと思ったのがきっかけです。メイクアップアーティストは人に接する職業なので、職場体験の場所の第一希望と第二希望は人と接することの多い、飲食業と接客業にしてみました。その結果、接客業の銀行に行かせていただくことになりました。はじめは、人と接するにしても、人との接し方がメイクアップアーティストと銀行員ではかけ離れていて、あまり夢に活かせそうにないと感じていました。ですが、実際に体験をしてみると、直接的な接客こそほとんどしていませんが、裏でどれだけの人が動いているかということを知りました。表面では簡単に起きていることに見えても裏側を見てみれば大勢の人の努力の結果により生まれるも

のなのだと感じました。職種による接し方以前に、接客に限らず、表がきれいに見えているのは裏の努力があるからこそだということを忘れないでいたいと思います。そして、このようなことは絶対に銀行に限った話ではないと思うので、何をするにもすぐに簡単だと決めつけずに、本質を見抜いてから何事も判断したいと思います。

これらの話から、私は将来自分がどんな道を選んだとしても、笑顔は絶対に絶やさないでいたいと思います。接客業に限らず、笑顔を絶やさないことで、笑顔は人に安心感を与えるのではないかと私は考えました。安心感以外にも笑顔だと他人からの第一印象が好印象になると考えました。実際に、銀行に勤めていらつしゃった社員の方の笑顔はとても素敵でした。自分もあのような素敵な笑顔になれば、好印象を与えることができているのではないかと考えています。ですので、私は将来、笑顔を絶やさない素敵な大人になりたいと思っています。

職場体験で学んだこと

杉並区立泉南中学校 二年

山本 あかり

今年の夏、私は職場体験をしました。

職場体験先は保育園です。先生にアンケートで聞かれた時にも迷わず保育園を志望しました。私には年の離れた幼い弟

がいて、子供と接する楽しさを体験していたからです。

三日間の職場体験で学んだことは二つあります。

一つめは「挨拶の大切さ」です。職場体験先の保育士の方々を見てみると、朝、給食を作って下さる調理室の方々に、わざわざ調理室の扉を開けて「おはようございます」と挨拶をしていることに気がきました。もちろん、挨拶が大切であるということはずっと前から知っています。しかしそれは、あくまでも「人に会ったついでにする」という認識でしかありませんでした。そのため、調理室の方々への挨拶には、とても衝撃を受けました。挨拶をするためだけに、調理室まで行って扉を開けるといふ行動を起こしているからです。これにより、挨拶が「ついで」ではなく「目的」として扱われるのが普通だったのだと実感しました。挨拶をすることは大切なことです。しかし、その重要度がとても高いことを学んだ気がします。自分が仕事をするときは、挨拶を仕事のうちとして意識せずとも行えるようになりたいと思いました。

二つめは「責任を負う」ということです。職場体験先の保育園では、水遊び中に園児たちが熱中症にならないように定期的に水分補給をさせたり、お昼寝中に園児たちが舐めたおもちゃの消毒をしたりしていました。これらはすべて園児たちを健康なまま各家庭に帰すためのものです。これを見て私は、責任を負うということは、責任を果たせないことが絶対にならないように、細かいところまで気を配って仕事をすることだと学びました。

三日間の職場体験は、学校に通っている時よりも疲れを感じました。しかし、学校に通っている時の何倍も楽しかった

のを覚えています。その理由は、やはり保育士という職業にやりがいがあったからです。たくさんの園児たちに「これ読んで」と絵本を渡された時は、求められていることに喜びを感じました。言葉の話せない〇歳児の気持ちを汲み取れた時は、その時に見せてくれる笑顔に胸がいっぱいになりました。何より、一日しか付き合えない私に、最終日、バイバイと別れを言いにきてくれたのは本当に嬉しかったです。

正直、今までは仕事はお金を得るために仕方なくやらなければならぬものだと思っていました。しかし、保育士という仕事は、少なくとも私にとっては、仕事による疲れと同等かそれ以上にやりがいのある仕事でした。おそらく、今社会にいるほとんどの人が今の仕事を続ける理由もやりがいにあると思います。自分の趣味が活かされたり、好きなことと関係があったりはしなくても、疲れるけれど、それと同時に大きなやりがいが出てくる。だから、ずっと続けられるのだと胸を張って言える仕事。将来はそんな仕事がしたいです。

私にとっての技術

北区立赤羽淵中学校 三年

川島 杏

私は夏休みに入ってから久しぶりに技術の教科書を開いた。少しページをめくると「技術の見方・考え方」というものが出てきた。そこには、製品を作るときに意識しなければ

ならないことが大きく四つに分けて書かれていた。その四つとは、社会からの要求、安全性、環境への負荷、そして経済性だった。それを見て、私は「ものづくりとは設定した課題を解決すればいいということではないのだ」と思い出した。そして、授業でそれらの条件を満たすのに苦労していた自分の姿も蘇ってくる。しかし実際に制約条件の下、製品の設計を構想する人たちはいかにして解決策を具体化しているのか、自分が授業の一環として行っていることを職として選んだ人たちに興味湧いた。今は進路や将来の夢について思い浮かぶことはないが、こういったきっかけを活かして様々な職業を知ること、これからの学校生活や仕事に繋がるかもしれないと思った。

ところが、調べることによって、設計はほとんどの職業において用いられていることを認識した。独創性に溢れた製品を作る立場に注目して再検索することにした。すると、制約があっても、創造性や革新を促す環境が整えられていれば、可能性は十分にあることや、多くの企業は、制約をクリエイティブな挑戦と捉え、新しい技術やアイデアを生み出す努力を続けていることを学んだ。私の制約は縛りというイメージとは、まったく異なる前向きな考え方がそこにはあった。社会要求を満たしながらも、独創的な製品は生まれることを学んだ。同時に同じ事柄も視点を変えれば風景ががらりと変わることを、知っていながら実践しなかった自分の存在に気づくことになった。

私は最近になって視野を広げ、他の人が目につけないようなところに着目して意見を述べるように意識し始めた。以前

までは全力を出したり、努力をしたりすることが怖く感じていた。自分が頑張っただけの世界を超えるものが認知されたとき、自分の必要性について不安になるからだ。将来の夢もそうだった。夢に近づこうと足を踏み入れたとき、この場所にはいられないように感じてすぐに元の場所へ戻ってきてしまう。「最大限の力を出して頑張らしよう」と言われてもあまり勇気は出なかった。しかし、今は少しずつ変わり始めていることを自覚している。憧れた場所を一直線に走り、帰り道を思い出しながら戻る。そしてときどき同じ場所に顔を出し、今度は景色や人の様子を観察してみる。

ふとはじめの文から読み返してみると、教科書の一ページから職業に対する関心に移り、自分の生き方の見直しに繋がっている。五教科とはまた違った幅広い学びを得られていることを実感した。理科と似ているが、専門用語を覚えること以外にも異なることがある。

かつての私は技術という教科から計画性を学んだ。そして今でも勉強面で活かしている。最近の私は将来の歩み方について学んだ。美術的な独自性を求められることもあるが、他人とその度に比べて落胆するのではなく、結果に自分自身が納得すること、そのために自分の努力を認めて経過を歩んでいくことを一つのゴールにした。しかし、これは目標に過ぎない。道を探すのは自分であり、進んでいくのも自分だ。

そして頼ることも忘れてはいけない。

手作りすることので

北区立赤羽岩淵中学校 三年

中山 まなみ

私は「ものを作る」ということが好きだ。ある時は手芸や工作のようなものであったり、料理やお菓子のようなものであったりするのだが、何よりも、その時に作りたいと思いついたものの完成を目指して、本やインターネットで作り方を調べたりして、時には私なりに少しアレンジを入れながら、一心に手を動かしている時間がとても楽しい。

私の学校の家庭科の授業では、今「幼児の発達を助けるおもちゃ」を製作している。この授業を受けながら、私は幼い頃に母にお手玉を作ってもらったことを思い出した。

当時、他の人が持っているのと同じようなお手玉が欲しかった私は、すぐに母にお願いした。すると、母は家にあつた私のお気に入りだった赤地に白い水玉模様の布で、たっぷりのビーズが入ったお手玉を三つ作ってくれた。さつきまでただの一枚の布だったものが、どんどん私の欲しかったお手玉へと形を変えていく様子を横で見ている、とても心が躍ったことを今でも覚えている。

私の家の周りには、大きなスーパーや百円ショップなどがあり、ある程度のお金を払えば、かなり簡単に、早く、欲しいものを手に入れることができる。そして、それらは今の流行に乗った形や柄であったり、凝ったデザインのものであつ

たりすることも多い。

一方、手作りの物は初めに思い描いたような希望の形になるまでに、それなりの時間や労力がかかることも多く、自分の技術が足りなくて、悔しい思いをすることもある。特に初めて作ったときには想像していたものとは、はるかに異なり、私自身もがっかりしてしまうことも多かった。

しかし、手作りにには市販のものを手にしたときに味わうことのできない、完成までの楽しみや、不安を味わうドキドキする気持ちや、失敗してもその後もう一度チャレンジして成功したときの達成感や、そこに至るまでの様々な思い出に溢れている。また、それを誰かに使ってもらったりする予定がある時は、相手の喜んでくれる顔を思い浮かべながら過ごす時間もまた、とても楽しいものである。

実は、あの時作ってもらったお手玉は今でも私の部屋にある。途中で遊びすぎて縫い目がほどこけてしまっても、思い出がよみがえっては懐かしく思い、母に何度か縫い直ししてもらっては、ずっと手元に持っていた。先日ひさしぶりにお手玉を手にとってみた。すると、お手玉が少し小さいことに気が付いた。母に聞いてみたところ、当時の私は幼くて、まだ手が小さかったので遊びやすいように、少し小さめに作ったのだと教えてくれた。当時の母も、私のことを想って、工夫してくれたのだと知って、改めて胸が温かくなった。

これからも、私は色々なものを手作りしようと思っていていくと思う。そして、いつか大人になって、これまで以上に料理をしたり、何かを手作りすることが増えるかもしれない。そして、時には自分のためだけでなく、誰かのため

に作ることもあるかもしれない。そんな時は、私も相手を想い、相手の喜ぶ顔を想像しながら、優しい気持ちをもってやることを大事にしていきたい。そして、手作りしたことで得ることのできるであろう、たくさんの楽しくて優しい思い出を作っていきたいと思う。

幸せ

北区立赤羽岩淵中学校 三年

吉澤 宗易

私は、職業体験で聞いた「好きなことを仕事にするのは幸せなことだ」という言葉を、今でも覚えている。その言葉は、私の将来に対する考え方を大きく変えた。

体験をした職場はスポーツ用品の販売店だった。

職業体験に行く前に、総合的な学習の時間に準備をしていたが、正直に言ってそのときは面倒くさいと思ってはいたし、何より中学生の自分が職場に行つて何かできることはあるのだろうかという不安が大きかった。事前訪問のときに至っては、緊張のあまりほぼ話すことができなかった。そんなこともあり、不安は募っていくばかりだった。

体験の初日、初めての仕事は入口のガラスや商品についた埃を払う掃除だった。朝から掃除なんて、少し嫌だと思つてしまった。しかし掃除が終わると、お店の方が飲み物を出してくれた。その優しさだけでも、割とやっていけるかもしれないという気持ちが湧いてきた。その後は、業者から届いた

商品を学校に運ぶために全て詰め直した。想像していたより自分でもできる仕事が多かった。初日を終えて、職場の雰囲気も良く、お店の方々も楽しそうに仕事をしていたので、働くことや仕事のイメージがはつきりしてきたような気がした。

次の日の午前中は、前日の仕事内容とあまり変わらず、生意気にも少し慣れてきたなんて思ってしまった。午後は、前日に詰め直した商品を学校へ運ぶ仕事だった。職員室や事務室で、商品を渡すついでに会話をしている様子を見ても、自分の仕事を楽しんでいることが伝わってきた。私も職員の方と少し話すことがあり、人と関わりながら仕事をするのはなかなか楽しいと思った。この日の体験を終えたときには、また職場に行つて仕事をするのを楽しみにするようになっていった。

最終日、午前中は前日に運びきれなかった荷物を運んだ。この日は学校にも行った。仕事先に知っている人がいるとこんな気持ちになるのかなと思つた。お店が刺繍を頼んでいる業者にも行き、仕事の様子を見させてもらった。客とお店だけでなく、色々な人が関わっていることを実感することができたので、良い経験だったと思う。

職業体験中、職場の方にインタビューをすることになっていて、なぜ今の仕事を選んだのかという質問をした。お店の方は「スポーツが好きだからかな。好きなことを仕事にするのは大変だけど、幸せなことなんだよ。」と答えた。私は、好きなことを仕事にできたから、あんなに楽しそうに仕事をするのができているのかなと思つた。

今までの私は、自分の職業についてあまり考えることがなかった。高校の進路選びなども明確な意思がないままだった。しかし職業体験を通して、好きなことなら楽しく仕事ができるし、幸せだろうな、自分も好きなことを仕事にしたいなと思うようになった。同時にそれが大変だということも実感した。今好きなことを仕事にしたくなるかもしれないし、将来好きになったことを仕事にしたいくなるかもしれないので、自分の「好き」を増やすために今まで興味がなかったことにも触れてみようと思う。それがいつか、私の幸せな人生をつくっていくと信じて。

職場体験を通して見つけた夢

葛飾区立亀有中学校 二年

小城 蒼 空

保健室の先生に対し、皆さんはどのようなイメージをもっているだろうか。教室で授業を受け、クラスメイトと話せている人たちには馴染みのない職業かもしれない。しかし、それ以外の人々にとっては学校内で唯一頼れる存在なのだ。

私は、校外学習の一環としてある小学校を訪れた。そこで私が体験したのは保健室の先生だった。冒頭に話した、馴染みのない側に、私もいた。

私が保健室の先生と自己紹介をしたその後、四年生の児童とその母親であろう女性が保健室を訪れた。四年生はその日、

社会科見学で全員いないはずだった。私は、彼が何故ここに来たのかを悟った。

彼は一見、年相応の元氣な男の子だった。しかし、話していくうち、彼は何か大きな悲しみとも傷ともいえる何ともいえないものをもっていると感じた。私はそれを分かってあげることができない。ただ、職場体験という短い期間でもその子が頼れるような存在になりたい、そう思った。

そうなるために、私はまず彼が何をやりたいのか、何が彼にとつて支えとなり、物事へのやる気となるのか、とにかくできる限り相手を知ること尽くした。そして、彼と関わりを深めていくうち、何となくだが理解してきたことがあった。それは、「甘えられる人」を欲していることだった。

「人に甘える」。この行為は一見、幼い子供しかやらない、成長していくにつれ、やるのはおかしいものと感じるかもしれない。だが、私はそうは思わない。「人に甘える」という行為は誰もが必要としていて、何かを抱えている人、気持ちが悪く、弱っている人が回復していける特效薬だと私は考える。同じく、「人に甘える」が無ければ生きられない者として。

それに気付いてきた私は、甘えられる存在、つまり大人という、子供からして不可解な存在でも、中学生という他人でもなく、本物のお兄さんのような安心できる存在に近付けることを心がけた。すると、初日は勉強やクラスメイトとの関わりを、少し苦しむように接し、敬遠していた様子の彼だったが、三日目になる頃には、勇気を出してオンライン授業を保健室から受けたり、クラスメイトと一緒に読書をしたりする姿が見られた。これらの勇気は彼、いや、彼と同じ境遇の

子供たちにとつてとても大きな成長だ。そして、皆と過ごせる普通という幸せな生活への良い兆候なのだ。私はその勇姿を見て、胸が熱くなった。

この職業の体験を通して、保健室の先生という存在の大切さを強く実感した。保健室登校の児童たちが学校内で唯一頼れる、「甘えられる」存在。それは彼ら彼女らにとつてとても大きな救いになるかけがえのないものだと分かった。保健室登校の児童たちは決して何も問題はない。ただ、自分でも上手く説明できない、どうしようもない大きな何かを抱えているだけなのだ。それを理解し、懸命に支える姿に私は感銘を受けた。

私もそういつた子供たちが皆と楽しく過ごせるため、また、助けを求める子供やその親を支えるために頼られる小児科医になりたい、そう思った。同じく、「人に甘える」が無ければ生きられない者として。

看護師になるために

葛飾区立高砂中学校 三年

熊田 亜優美

私は現在、中学三年生。漠然とではありますが、将来のことを少しずつ考えるようになってきました。学校でも進路についての授業が増えて、進学に関することを調べたり、先生に相談していくうちに将来の夢がより身近に感じられる気がしています。

テレビや新聞では何かしら医療に関する話題が多く取り上げられています。猛威を振るっていた新型コロナウイルス感染症のニュースは連日のように報道されていました。またテレビでは医療を題材にしたドラマも多く観られます。私が医療関係の仕事に就きたいと思ったのはそんなメディアに刺激され、興味をもつようになったこと、マザーテレサやナイチンゲールの伝記を読んで感動したこともありですが、何より私も人を助けたいと思う強い気持ちが大きいのと思います。

これからますます高齢化は進み、看護師が必要とされるでしょう。また病院だけではなく、介護施設、学校の保健室、保育園など活躍の場は増えています。今現在でも人手が足りておらず、アジア圏から看護師を呼び、日本で働ける看護師を育てているそうです。就職難と言われる時代ではありますが、就職先に困ることはないでしょう。そして日本国内どこに移住しても、そこに病院があれば看護師として働けるのも魅力です。

とはいえ、想像以上に大変な仕事だと思います。一日中、立ちっぱなしで、人の命に関わることであるので、ミスは絶対に許されず常に緊張し続けるなんて心身共に大変そうであることは経験していなくても認識できます。また、日々進化する医療にも柔軟に対応できるようにしなくてはならないため、学び続けることも必要です。

看護師になるためには資格はもちろんです。自分自身の健康が何よりも大切であると思います。心身共に健康であれば心にも余裕ができます。余裕があれば患者さんに対して優しく接することができます。笑顔で看護することが少しでも

患者さんを元気づけることもできるでしょう。医師よりも患者さんと近い距離にいる看護師の役割は、とても重要だと思います。人間は皆一緒ではありません。怒りっぽい人、怖がりな人、せっかちな人など十人十色です。そんな一人一人違う性格の人に合わせた対応が必要になってきます。

まだ看護師の道へ進むとはっきり決まったわけではないし、すぐにそのための勉強を始められる年齢でもありません。しかし、その土台作りは今からでも始められそうです。今の勉強を頑張ること、そして看護師になると決めたら、学校で看護の勉強をすることを目標に歩んでいきたいです。近年、資格認定試験に合格した、医師に代わって一定レベルの診療を行うことができる診療看護師と呼ばれる看護師も活躍し始めていると記事で読みました。医師だけに頼らず看護師にも救える病気があるならば、さらにやりがいがあります。

責任と役割の大きい看護の仕事は重圧も大きいと思います。時には死と直面することもあるだろうし、完治して元気に退院していく患者さんを見送ることもできるでしょう。様々な場面でどんな人にも的確に対応できる器の大きな人になりたいです。



私にとつてのものづくり

江戸川区立小松川第二中学校 三年

新井陽菜

幼い頃からものづくりが好きでした。私がものづくりを始めたのは、自分の仕事が忙しいのに、私のことをずっと優先してくれていた母に対して、何かしてあげたい、という思いが募ったことがきっかけだったと思います。

初めて本格的なものづくりをした時、私が作ったのは、針山として使えそうな小さなクッションでした。今思えば、「そんな物貰ってもなあ。」と感じる小さな小さなプレゼント。そんな些細なものを母は、「ありがとう。大切にするね。」と言って受け取ってくれました。この時の母の優しい笑顔は、今でも忘れられません。

中学生になって、技術科の授業で初めて作ったのは、木の板を使ったキーホルダーでした。家では木を切つてものを作るといことができなかったため、木の板を切つて自分の好きな形を作るとい時間がとても新鮮で、わくわくしていました。

しかし、ものづくりに苦戦は付き物です。首が長い恐竜の形に切ることを決めた私は、技術科の授業中、しばらく電動糸のこ盤とにらめっこをしていました。切っている時に折れてしまいそうな長くて細い首。カーブが多く切りにくい体。これらをどうやって切れば、綺麗な形になるのだろうかと思

らく悩んでいました。すると、友人たちが

「私も形切るの難しくて、ガタガタになっちゃったけど、やすりでたくさんやすったらきれいになったよ！」

「私は、細いところが折れないように、少しずつ慎重に切っていたら、けっこう綺麗にできたよ。」

と、たくさんアドバイスをくれました。この時のアドバイスを意識して作ったことで、無事に綺麗なキーホルダーを作ることができ、江戸川区立中学校合同作品展に、このキーホルダーを出品展示していただくことができました。このことをアドバイスくれた友人たちに伝えると、「すごいね。頑張ってたもんね。」と、まるで自分のことのように喜んでくれました。学校の行事でもなんでもない、何気ない日常の中でも、こういった些細な喜びを友人と共有できたことが、私にとつてはとても嬉しい出来事でした。

私にとつてのものづくりとは、人との繋がりでです。私が作ったものを渡すことで笑顔になってくれる人がいる、ものづくりを通して、仲間と仲良くなれる、同じ気持ちを持てる、このような、人との繋がりをより良いものにできるものの一つがものづくりであると、これまでの経験や技術科の授業から学ぶことができました。また、技術科の授業を通して、ものづくりの楽しさや、ものづくりに対する好きという気持ちを実感することができました。

私が昔母にプレゼントした小さなクッションは、今でも私の家で針山として活躍し、大切に使われています。私は、私の存在がものづくり、あるいは、この小さなクッションのよくなものであればいいと思います。人を笑顔にするきっかけ

となる、誰かと誰かを繋ぐことができる、誰かにいつまでも大切にしたいと思ってもらえる、そんな存在に私はなりたいです。

自分の性質を生かした働き方

調布市立第八中学校 一年

安田匠杜

私の親は個人事業主です。そのため、サラリーマンと違ってどのように働いているか、よく親に話してもらっています。私の父は何かを修理したりするのが得意です。私が初めてもらったパソコンは親が修理したものでした。その他にも、普段からカメラを直したり、ときには私の壊れたゲームのコントローラーなども修理してくれたりします。

私は一度、父のカメラの修理を手伝わせてもらったことがあります。昔から電子工作などの機械的な作業が好きだった私は、父がカメラをどの様に直しているのかを知り、自分でも直せるようになってみたいなと思ったからです。細かい作業自体は得意ではないので一筋縄にはいきませんが、機械をいじる作業はとても楽しく、自分の好きなものや、得意なものを活かして働くこともできるのだなというふうに実感しました。

また、私の母は父の仕事の手伝いをしながら、仕事としてコードを書いてプログラムを組んだりしています。私は小学

生の頃に自分でゲームを作ってみたいと思い、母にプログラミングを教わったことがあります。母のプログラミングの知識は私が幼かった頃に育児をしながら勉強して得たものです。何事も、地道に続けていけば仕事になったり、人を助けたりすることができるのだなと思いました。

私は今、音楽やトレーディングカードゲーム、ビデオゲームなどが好きで、将来はアーティストになりたい、ゲームクリエイターになりたいなど思っています。もちろんそれはどこかの会社に勤めていても叶えることができる夢だと思います。しかしここで、自分のやりたいことのできる会社に入るために頑張ろうと、すぐ結論付けてしまわずに、自分の性質なども考えながら、どのようにして叶えていくのが一番いいかを考えるべきだと思います。会社に勤める良さとしては、安定した収入を得ることができたり、働かないといけない日、休める日が明確に定まっていたりして、仕事とプライベートのメリハリがつけやすくなるなどというものがあると思います。ですが、通勤をしないといけなかったり、人と常に関わっていないといけないなかったり、人と、個人事業主であれば、メリハリはつきにくいですし、安定した給料を得ることなどはできませんが、ある程度は自分の好きなところで働くことができ、人との関わり具合にも調整が利くと思います。

私は班活動などの協力作業の際に、人に仕事を割り振ったりすることがあります。しかし、この人がどれくらいできるのか、本当にこれだけ任せてもいいのかなどの心配が先走ってしまい、最終的には一人で全てやる方が楽だなどと思って

しまうことが多々あります。きっとそれは、これから大人になつていくにつれて、会社などで働いたりすれば、何回も経験するようないと思ひます。このような自分の性質は簡単に直らないと思ひます。ではこのような性質をもちながらも最大限自分の特徴を活かすにはと考へたときに、会社に勤めず自分で働いてみる、などの自分に合つた選択肢が見えてくると思ひます。

私は、両親の仕事を手伝わせてもらつた経験を通して、仕事は自分の性質を理解して、それに合つた仕事の仕方をするこゝとで、最大限のポテンシャルを出し、続けていくことのできるものなのだろうと思ひました。自分がどのような人間なのかを理解して、何が好きなのか、何が苦手なのかなどをしっかりと考へて、私はこれから生きていきたいです。

いつか来る輝く未来

国分寺市立第四中学校 三年

三ツ矢 香 桜

「将来の夢はなんですか。」

誰もが人生で一回はされるであろう質問にあなたはどつ答えるのだろうか。何か具体的な職業名を答えるのだろうか。それともまだ抽象的だけでも進みたい道を答えるのだろうか。きっとそれぞれに答へがあり、それぞれが思ひ描く未来があるのだろうか。では、そんな自分の将来を想像したとき、

あなたの未来は輝いているのだろうか。将来に希望を抱けているのだろうか。私はこの自分自身からの質問に「はい」と言うことができなかつた。職場体験に行くまでは。

中学二年生だつた私は自分の将来に対して漠然とした不安を感じていた。それはもうすぐ進路選択をし始めなければいけない時期だつたということと、私の仕事に対するイメージが原因だつた。私は仕事とは辛くて大変なものというイメージをもつていた。そのため、きつとこのまま中学校を卒業し、高校に行き、大学に行き、どこかの会社に就職するのだろうかと思つていた私は日々辛い思ひをして仕事をし、つまらない毎日を送る自分を勝手に想像していた。そんなときに学校で職場体験に行くことになつた。この出来事が私の考へを変へることになるとはこの時の私は思つてもいなかつた。私の職場体験先はある保育園だつた。そこでは保育士の仕事を体験させていただいた。職場体験が始まる前、私が仕事に対してあまり良いイメージをもつていないことに加え、事前訪問時に子供たちに怪我をさせたり、危険にさらさないようにいくつかの注意事項を話されたため、保育士とは子供の命を預かるすごく大変な仕事なのだと思ひ、私はとても身構へていた。そんな状態で始まつた職場体験では保育士の仕事を体験するべく、子供たちと遊んだり、子供たちの遊びの準備や後片付けをしたり、お昼寝の時には子供たちの寝かしつけをしたりといろいろなことをした。ここまで聞いている分には保育士の大変さは伝わっていないかもしれないが、お昼寝の時には私が子供たちの寝かしつけをしている横で保育士さん達は交替をしながら数分から数十分の間隔で子供たちの息や寝てい

る体勢を観察し、紙に記録していた。後から聞いたところによれば、子供特に小さい子は眠っている間に突然死んでしまうことがあり、それを防ぐために何事もなく安全に眠れているのか用心深く観察する必要があるそうだ。やはり保育士とは子供の命を預かる責任がともなう大変な仕事だった。けれども、こんなに大変な仕事をしているのにもかかわらず、子供たちと接する保育士さんたちの顔を見るととても楽しそうな、幸せそうな顔をしていた。何が保育士さんたちをそんな顔にさせるのか聞いてみたところ、ある先生は「子供たちの笑顔が見れたときかな。」といい、別の先生は「子供たちの成長が見れたときよ。」と言っていた。保育士さんたちは子供たちから元気をもらって、楽しそうに仕事をしていた。そして私もまた、あんなに大変だと思っていた職場体験だったのに子供たちや保育士さんたちと一緒に遊んだり、笑ったりして過ごすうちに気持ちに変化があり、職場体験を終える頃には大変だったという気持ちよりも「楽しかった」に変わっていた。

私はこの職場体験を通じて学んだことがあった。それは仕事とは楽しめるといふことだ。たしかにどんな仕事も大変だし、責任も伴うけれど、辛くだけではなく、楽しむこともできるし、喜びを感じることでもできるのだ。また仕事をすることで自分だけではなく誰かの役に立つことができ、そうして社会は回っているのだと気付くこともできた。

私は今、中学三年生だ。進路選択もしなければならぬし、将来についても考えていかなければならない。でも大丈夫。今の私はあの質問に「はい」と言える。自分の輝く未来を想像できる。そんないつかの未来が来ることを今日も私は楽し

みに待っている。

夢への第一歩

国分寺市立第四中学校 二年

近藤 百恵

私が将来目指している職業は税理士です。この職業を選んだ理由や、それに対する職業観、人生観、そして私の将来についての考えをもう一度考え直しました。それを述べようと思えます。

まず、私が税理士に興味をもったきっかけは、私が幼少期に読んだ本に大きな影響を与えられたことです。私は元々、税金の仕組みや銀行員について興味があり、将来はお金にまつわる仕事に就きたいと考えていました。そんな時に、税理士について詳しく説明されている本に出会いました。本を読む前は、名前はなんとなく知っていましたが興味はありませんでした。ですが、読むと税理士の魅力について知ることができ、とても面白そうと思えば本格的に調べ始めたのがきっかけです。

税理士に対する私の職業観は、「信頼と専門知識の融合」です。税理士は法律や会計の専門知識を駆使して、クライアントの問題を解決する必要があります。そのためには、常に最新の知識を習得し続ける努力が必要です。また、クライアントとの信頼関係を築くことも非常に重要です。税務に関す

る情報は簡単なものではないので、常に信頼される存在でなければいけません。信頼と専門知識、この二つが融合して初めて、優れた税理士としての仕事ができると考えています。

人生において、私は「他者への貢献」が一番大切だと思っています。税理士として働くことで、多くの企業や個人をサポートし、彼らの経済的な問題を解決する手助けができることは、一番の社会貢献だと思っています。特に、中小企業や個人事業主にとって、税務の問題は非常に大きな負担だと思います。彼らが安心してビジネスを続けられるように支援することで、社会全体の経済が健全に発展していく手助けになるのではないかと考えています。

私の将来の理想像は、地域社会に密着した税理士として活躍することです。私の地元、国分寺の企業や個人事業主と緊密に連携し、企業の成長をサポートしたいと考えています。特に、地元の農家の方々に対して、税務のアドバイスをを行い、経営のサポートをすることに意義を感じています。地域社会全体が元気で活気づいていくことが、私にとっての最大の喜びです。

税理士になるためには、まずはしっかりと勉強をして資格を取得することが必要です。現在、中学生として学んでいる基礎的な知識も、将来のためにとっても大切だと考えています。数学や社会科学の勉強を通じて、数値に対する理解や社会の仕組みを学ぶことは、税理士としての基礎を築くために欠かせません。また、大学では会計学や経営学を専攻し、専門的な知識を深めたいです。

さらに、税理士として成長するためには、コミュニケーション

ン能力も重要です。クライアントとの信頼関係を築くためには、相手の話をよく聞き、適切なアドバイスを提供する能力が求められます。これを身に付けるために、学校生活や部活動、ボランティア活動などを通じて、他者とのコミュニケーションを積極的に図っていきたいと考えています。

また、税理士としての経験を積むことで、自分自身も成長していくことができると考えています。そのため、自己研鑽をしながら努力し続けたいです。

最後に、私の目標は税理士としてだけでなく人間としても成長し続けることです。日々の努力を怠らず、新しい知識を常に吸収し、他者への貢献を忘れないことが大切です。どんなに難しい問題に直面しても、前向きな姿勢で取り組み続けることで、必ずや目標を達成できると信じています。

このように、税理士という職業を通じて、社会に貢献し、自分自身も成長していくことが私の目指す未来です。この夢を実現するために、これからも努力を続け、信頼される税理士になるために頑張りたいです。



私の夢

三宅村立三宅中学校 二年

長谷川 豪

私には将来の夢があります。それは海上保安官になることです

伊豆諸島の一つである三宅島で私は育ちました。三宅島は美しい海に囲まれており、毎日のように海を眺めることができます。しかし、ただ美しいだけではありません。低気圧や台風の時には大しけとなり、牙をむいた海は本当に恐ろしいです。また、海の存在は私たち離島住民にとっては大変重要です。例えば漁業を職業としている方が多くいますし、海がなければ食料や生活物資などを内地から運んできてくれる船が機能せず、生きていくことが困難な状況となってしまうかもしれません。私は普段の生活から、海が多彩な顔をもっていることを知っています。そんな海が好きだからこそ、その安全を守る仕事に就きたいと考えるようになりました。

私が海上保安官という職業に興味をもつようになった理由は二つあります。

一つめは、小さい頃から海が好きだからです。家の近くに広い海が広がっていて、夏には家族や友人たちと一緒に海水浴を楽しんだり、シーグラスや貝殻を拾いに行ったりします。海で楽しく遊んだり海のきれいな姿を見るたびに、「心がリフレッシュされます。海に触れるたびに、「この海を守りたい」

という気持ちが強くなりました。

二つめは、二〇二二年に発生した知床観光船沈没事故を見て、大変ショックを受けたからです。事故のニュースが連日報道されるなか、海上保安官が活躍する姿を見て、この職業の存在を知りました。事故の現場で冷静な判断をし、人命を救う海上保安官たちの懸命な姿に心を打たれ、私も仕事を通じて人々と日本の海の安全を守りたいと思うようになりました。

海上保安官の仕事は、主に三つあります。海を舞台として行われる事件・事故が発生した際に人命救助や哨戒などと人々の安全を守る仕事、海底地形や海流などを調べ海の地図を刊行する仕事、船の航海を安全に行うための目印となる灯台の建設、整備する仕事があります。

将来の夢を叶えるために、私は今のうちから準備を進めています。まず、学校での勉強をしっかりと頑張り、海上保安官になるための学校に進学できるように勉強しています。また、私はバレーボール部に所属しており、キャプテンとしてチームを引っ張っていくことができるように技術力やジャンプ力を高めるだけでなく、体力やメンタルなども鍛えています。チームスポーツであるバレーボールを通して私は、仲間と協力しながら困難に立ち向かう力を養うことができると感じています。

これらの経験を生かして、将来海上保安官としてしっかりと役に立てるように努力していきます。バレーボール部で学んだことを活かして、自然相手にも負けない体力づくりや仲間と協力する力などを磨きながら、海上保安官に必要なスキルを身に付けていきたいと思っています。これからも目標に

向かって一生懸命に取り組み、将来の夢を実現するために努力し続けます。海と人々の安全を守るために全力を尽くし、日本の人達たちに貢献できるような海上保安官になりたいと思います。

私の職業観

東京都立両国高等学校附属中学校 三年

鈴木可憐

私は職場体験を通して、見えないところでしている努力を知った。

私の職場体験先は保育園だった。小さい子供と接することは好きだったので、全力を尽くせばきつと上手くいくだろう、と思っていた。

しかし迎えた初日。次の予定への準備はとても素早くしなくてはいられないし、オムツ替えも、手洗いの手伝いも、着替えの手伝いも、分からないことばかりでとても大変だった。他の先生方も子供の面倒を見ることに手がいっぱい、私はそんな先生方を見てやり方を覚えるしかなかった。初日で子供と接するラストの仕事、寝かしつけでは、子供が安心して寝られるようにと見守りながら背中を優しくたたいていた。しかし先生方から、子供が新しい先生とられるのを楽しんでしまつて寝ないから、顔が見えないように寝かしつけてくださいと注意を受けてしまった。

それでも、日にちを重ねていくにつれ、仕事にはだんだん慣れてきた。初日は分からないことだらけだし、自分が良いと思った行動が裏目にでてしまったが、慣れてくると先を見て行動できるようになり、また、手伝えることはないか聞いて積極的に行動できるようになった。

大変なことが多かったけれど、最終日にはできる仕事が増え、自分のベストを尽くせてとても達成感があった。

私が今までのお礼を言おうと先生方に会いに行ったとき、先生方が話しているのが聞こえた。

「○○くん、家ではこういう様子で困っている、と連絡帳に書いてあったんですけど、どう対応していったらいいんでしょうね。様子見してみますか。」

私はこの会話を聞いて、先生方は仕事をただこなすだけではなく、一人一人に合わせた対応まで考えながらやっていたのだな、と思い感心した。思い返してみれば、先生方の子供たちへの対応は一人一人違っていた。

給食を食べさせるときも、よく噛まない子には近くに座って食べるのを手伝ったり、少し頑固な子へのけんかの仲直りのほめ言葉は毎回かつこいい、だったり、私は全然気付かなかったのだが、一見明るくて元気な子が熱がありそうだと気付いたり、先生は仕事をこなすだけでなく子供一人一人の様子をよく見ていた。

私は仕事をただこなすことだけをベストだと思っていたが、先生方の会話を聞いて、行動だけでなく、細かい配慮が大切なのだ気付いた。このように、細かいところまで気にしていることは他の人から見てもあまり気付くことができない。

人に気付かれない部分までこなせているのはとてもすごいと思うし、子供、仕事が好きでないとできないことだと思う。

私はまだ将来の夢がないが、この職場体験を通して、自分の好きな職に就いて、仕事をこなすだけでなく、自分が大事にしたいこだわりをもって全力を尽くしたいなと思った。

和菓子の物語

東京都立両国高等学校附属中学校 三年

高田丹喜

和菓子は好きだろうか。私は大好きだ。鮮やかだが派手すぎない色合い、季節を感じる見た目、甘すぎない上品な味。そして何より私は弟たちと一緒に食べられるということが嬉しかった。私の弟たちは小麦や卵のアレルギーをもっていて、食べられるスイーツが少なかったのだ。そんなことから私は和菓子に興味をもち、調べてきた。

昨年度、私の学校に和菓子職人の方が来てくださり、練り切りやハサミ菊を目の前で作ってくださった。練り切りとは季節の風物などを写しとって作られる芸術的な和菓子で、ハサミ菊とは製菓用の細工はさみを使って仕上げる上生菓子のことだ。私は自分の目の前で美しくておいしい花が作られていることに感動した。また、職人さんのスムーズな手さばきや、花びら一つ一つを丁寧に仕上げる姿に「職人」としての心意気を感じた。

職人さんの作る様子を間近で見ながら、実際に作ってみたいと思っていた私は、今年の夏休み、母の勧めもあり日本文化が体験できる場所で実際に和菓子づくりを体験した。作る前は自分でも作れそうだなと思っていたが、それは大きな間違いだった。和菓子作りは餡の形を整え、着色するところから始まる。しかしここからうまくいかない。まず、色ムラなく色を付けるのに時間がかかる。次の「職人技」といわれる白あんの中にこしあんを入れる作業も白あんが破れたりしてなかなかうまくできない。形を整える作業でも強く押ししてまうのでつぶれてしまう。そんな風に進めていってできた自分の作品は思い描いていた完成品とは程遠いものだった。しかし、楽しく、興味深い体験だった。この体験を通して私は改めて「職人」の大きさを感じた。また、ただ作るだけでなく気持ちを含めて、どのようにしたら美しく見えるか考えながら作るため、体力を使うのだなと感じた。

近年、日本文化の衰退が進んでいる。和菓子もその一つであろう。最近和菓子の老舗が少なくなっていると聞いたことがある。調べてみると、その原因は気候変動によって良質な材料が使えなくなっていることや、後継者不足、若者の和菓子離れによる需要の減少などがあげられるようだ。しかし、私はそのようなことで和菓子の文化が失われるのはもったいないと思う。和菓子の文化とは食べることだけではない。作るところから、もっと言えば材料を生産するところからだ。「職人技」をもっと色々な人に見てもらいたいし、実際に和菓子を作ってみてほしい。食べるだけでは気付くことのできない発見がたくさんあると思う。

では、和菓子の文化を守り、広めるためには私には何ができるだろうか。私はまず正しく知ることから始めたいと思う。和菓子を作ったり、頻繁に食べたりしているが、和菓子について本当に知っているとは言えないので和菓子について教えることができるレベルまで知っていききたい。知ることができたら次は伝えることだ。学校でのポスターや発表でも伝えることができる。また、私は来年度から海外に留学するので海外でも日本のスイーツについて伝えて、たくさんの方々に日本の文化について興味をもってもらいたい。

今後は職人さんに感謝して、弟たちと楽しく和菓子を食べていきたい。

都庁で学んだ働く意義

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年

栗村実世

「すべての国民は勤労の権利を有し、義務を負う。」

これは日本国憲法第二十七条の条文である。この一文は、働くことが人生において基本的かつ重要な要素であることを示している。しかし、私は中学二年生になるまで、「働く」ことは、生活するためにお金を稼ぐことであり、それ以上でも、それ以下でもないと考えて、働くことの重要性や意味について、深く考えたこともなかった。けれども、東京都庁での職場体験学習を通じて、働くことの価値について理解を深

めることができた。働くということは、単に生活のためにお金を稼ぐことではなく社会貢献の手段であり、仕事を通じて得られるやりがいや充実感が人生をより豊かにするということなのである。

昨春秋、中学二年生で行われた職場体験学習で私が三日間勤務したのは、東京都教育庁である。職場体験学習初日、緊張のあまりぎこちない挨拶しかできなかった私たちを、職員の方々は温かく迎え入れてくれた。職員の方々の温かさで私たちの緊張がほぐれ、最高の職場体験を過ごすことができた。

職場体験学習の中で特に印象に残ったのは、教育政策に関する文書作成である。最初は単純なデスクワークだと思っていたが、教育庁の職員の一人として真剣に取り組む中で、自分の仕事が家庭、地域、学校、教育を支えているというやりがいを感じるようになった。私を指導してくださった職員の方からは、

「私たちの仕事は、見えないところで多くの人の生活や教育に影響を与える。だからこそ、ひとつひとつの仕事に誇りをもって取り組むことが大切だ。」

という言葉を受けた。この言葉は、仕事の意義を改めて私に教えてくれた。

最終日に行ったプレゼンテーションの準備では、学校をよりよくするためにできることについて中学生である私たちが考え、それを職場の方々発表する機会があった。学校以外の場所でプレゼンテーションを行う初めての体験であり大変緊張しながらも職員の方からいただいたアドバイスをもちに、データやイラストを駆使して情報をわかりやすく伝え

た。ある職員の方が、

「いかにして聞いている人の心に響くプレゼンテーションを行うか、それが私たちの仕事の醍醐味だ。あなたたちの提案が未来の社会に良い影響を与える一步になるかもしれない。」

とおっしゃっていたことは忘れられない出来事である。発表後、職員の方々からの肯定的な感想と具体的なアドバイスを受けたことは、私にとっての大きな自信となった。

職場体験学習を通じて私は、働くことが単にお金をもらうためのものではなく、自分の働きが社会のためになっているという満足感と充実感を得るためのものと学んだ。今後の学校生活では、この学びを活かして、勉強や部活動、地域活動にも積極的に取り組み、社会に貢献できる人材になりたいと気持ちを新たにしたい。そして、将来、働くことで得られるやりがいや社会貢献の実感を通じて、自分の人生をより豊かなものにしていきたい。私たちはいずれ大人になり、働くことになるだろう。私は将来、働くことを通じて誰かの支えになりたい。そして自分の仕事に誇りをもって好きだと言える大人になりたい。自分の仕事を通じて社会貢献し、充実感を得ることができ、そんな人生を私は築いていきたい。



自分の「好き」を将来の夢に

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

久下沼 志 織

「将来の夢は何ですか?」。学生である私は様々な場面であう問われる。しかし、これは私が最も返答に困る問いである。私は勉強や運動が特別できるわけでもなく、特に趣味もないため、明確な将来のビジョンが浮かばないのだ。

そんな私は普段から、自分には何ができるか、何に挑戦したいのかを考えることが多かった。ある時、学校で英語のレシテーションコンテストを実施することを聞いた。これは英語で書かれた文章を暗記し、ジェスチャーや声量を工夫して発表するというものだ。暗記ならば私にもできるかもしれないと思った。まずは予選を通過することを目標に、私はチャレンジすることを決めた。

コンテストに向けての練習は思いのほか楽しいものだった。これまでも国語の授業で日本語の文章の暗記をしたことは何度もある。しかし英語の文章を暗記する際には、日本語の文章の暗記では味わうことのできない、新たな単語や文法を知る喜びがあった。それに、英語の良い発音を模索し、気持ちを込めて口に出すと、まるで自分が英語を話せるように気持ちが良いかった。この時初めて、「私は英語が好きだ。」と思った。

そして私は練習のかがあつて予選を通過し、本戦に参加

することができた。まさか私が出場できるとは思っていなかったが、本戦でも楽しんで発表することができた。発表を終え、三位を取ることができた。この経験で自分に少し自信がついたが、何よりも「英語に触れる」という、自分の興味があること、もっと挑戦したいと思えることを見つけられて嬉しかった。

私はそれを機に、以前よりも英語に興味をもつようになった。学校の英語の授業が楽しく、積極的に取り組むようになったのはもちろん、駅やマップ、説明書などの英語で書かれた文章も意味を調べることが増えた。

英語に興味をもった私が「もっと英語を学んで、たくさん話せるようになりたい」と思った出来事がある。これは家族旅行に行ったある日の話だ。外国人観光客が駅で道を尋ねてきたのだ。英語で話しかけられた。私は道も英語も分からず、おどおどしてしまった。そのため、観光案内所まで案内すると、案内所の職員が英語で対応してくださった。流暢な英語で外国人観光客と笑顔で会話する職員が私の目にはとても輝いて見えた。そして、観光客の方も笑顔で手を振りながら歩いて行った。どうしたら英語が話せるようになるのかを知りたくなった私は、思わず職員に声をかけてしまった。職員は「大事なのは普段から英語を使うことだ。」と教えてくれた。

この経験を経て、私も英語を使って世界の国の人々と楽しく会話したり、外国の方々の役に立ったりできればどんなに素敵だろうかと思うようになった。私の英語で日本のことを伝えたり、外国の文化について知ったりしてみたい。英語は全世界共通語だ。私が声をかけた観光案内所の職員は五か国

語を話せるそうだ。私もまずは英語から、自分の世界を広げていきたい。この自分の将来の夢に向けて、今から少しずついいから努力したいと思う。英語は失敗を恐れずに使って、話しての繰り返しが大切だと思う。今は以前よりも、目標をもって頑張ることが増えたように感じる。自分の小さな好奇心の種が将来の花を咲かせるためのかけがえのない一步になったはずだ。「私の英語で世界の人を笑顔にしたい」。この夢はまだまだ明確な夢ではないかもしれない。しかし、将来の夢を聞かれたら胸を張って自分の夢を答えたい。自分の好きを大切に、夢に向かって努力する自分を信じて頑張っていきたい。

失敗は成功の基

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

箕輪 和真

職場体験と聞いて最初に思いついたのは、スーパーの仕事や、医者などでした。私は、ずっとこれといった将来に就きたい仕事がなかったので、初めは何にしようかと迷いました。友達みんな将来の夢や、就きたい職業が決まっています。私だけ何か取り残されてしまったような気持ちになりました。そんな中、行先一覧を眺めていると、「自衛隊」の文字が目にとまりました。その時の私は、学生のうちに自衛隊と深くかかわりあう機会なんてこのほかにないと思いました。

そして、自衛隊へ職場体験に行くことを決めました。国民のために体を張って守っている姿に憧れました。しかし、私は職場体験へ行くことが不安になりました。なぜなら規律が厳しかったり、日々のトレーニングがきつかったりすることを考えたからです。そして私が最も不安になったことは失敗をすることでした。私の失敗で迷惑をかけてしまったらどうしよう。そんなことを考えながら職場体験の準備を行っていると、体験の日はどんどん近づいてきました。私はもともと失敗を恐れて消極的になることが多くありました。

職場体験一日目。緊張により朝早くから目が覚めてしまい、そこから眠ることができませんでした。職場体験のことを考えると私が失敗してしまう場面ばかりを想像してしまいました。

自衛隊の人に案内されて、いざ基地に入って周辺を見学していると、私は目を丸くしました。そこはまるで、自衛隊の基地というよりは一つの街のように見えました。隊員の寮や食堂、ATMまであり想像しているよりもはるかに充実していました。

職場体験でまず教わったのは、自衛隊の基本的な教練訓練でした。教練訓練では体の動きが普段と違い、覚えるのが大変でした。また、そこで覚えたことはすれ違う隊員の方々に使うので失礼のないようにと緊張してしまいました。そのため、最初のうちは間違えてしまったり、教えてもらったりすることが多くありました。訓練の一環で実際に隊長として隊員に指示を出すことを行いました。教練訓練がまだ完璧でなかった私は、やはり失敗を恐れていました。

「休め、前へ進め……。」

その気持ちが行動に表れてしまい、元気のない声になってしまいました。そこからはずっと失敗のことを考えてしまい、気が沈んでしまっていました。すると、それを見守ってくれていた担当の方が、

「失敗することは悪いことじゃない。大切なのは勇気を出して全力で取り組むことだ。失敗は成功の基だ。」

と、肩にポンと手を置きながら励ましの言葉をくれました。その時の私は、その言葉が心にとっても刺さりました。「失敗は恥ずかしくなんかはない」。そんな気持ちになると、勇気が湧いてくるような気がしました。

職場体験二日目。この日の私は、緊張も失敗におびえることもありませんでした。隊長の体験をするときには立候補し、積極的に声をかけて指示を出したおかげで、失敗はありませんでした。失敗の経験を活かし、次につなげることができたのです。

職場体験に行く前までは、失敗することを考えたら、消極的になってしまうことも多くありました。職場体験で私は、失敗は成功の基であることを学びました。そのおかげで私は、失敗を恐れずに挑戦していくことが前よりはるかに多くなりました。例えば失敗しても次に失敗しないように修正していくこともあります。私は今でも職場体験で励ましてくれた時の言葉を胸に生活しています。

高等学校の部 最優秀賞

瑞穂わが学びの庭や

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

稲垣 琥 大

私は都立高校で唯一の畜産科に通い、学校生活の中で様々なことを学んでいます。その中でも今回は専門科目の実習に焦点を当てて書いていきたいと思えます。

そもそも、私がこの高校に入学することを決めた理由として豊富な実習があるからという点が挙げられます。座学だけではなく、自らの経験を積むことができる環境はとても恵まれた環境だと思っています。実習と一言で言ってもその内容は多種多様であり、一般的な家畜である、牛、豚、鶏から珍しい動物である、ポニー、コモンリスザル、メンフクロウなどの飼育実習、さらには作物の栽培や自然環境に関する実習などがあります。

その中でも一番印象に残っている実習はブロイラーという肉用の鶏の飼育と解体です。この実習では最初に一人一羽ひよこを与えられます。そして日々飼育や観察をして大事に育てます。その後、大きくなったら解体室に運び自分で育てたブロイラーをと畜して解体し、食肉に加工します。

この実習をして最初に感じた感情は「悲しみ」でした。学校に迎え入れられたひよこたちは言葉では言い表せないほど

かわいく、私たち生徒の後ろを懸命に走ってついてくる光景はもはや尊さをも感じさせるものでした。丹精を込めて育てたことでひよこたちは瞬く間に成長し、重さは二キロを超えました。すくすく育ってくれてうれしい反面、もう少しで肉になってしまうという思いが頭をよぎりました。最初から肉になるという未来を知っていても、やはり愛情を込めて育ててきたこの思いはそう簡単に処理することはできませんでした。しかし、実習を続けていく中で様々な知識や経験を得ていったとき、私の中の命に対する価値観が大きく変わりました。特に大きく変わった瞬間はブロイラーを解体するときです。私は解体する前に自らの不安な気持ちを制御するのに頭がいっぱいでした。その気持ちはと畜をするときに用いる包丁を握るまで頭の中をぐるぐるとまわっていました。そんな時、先生があることを言ってくれました。「包丁を握ったらためらいなく一気に楽にしてあげなさい。と畜をする側が躊躇していたら、動揺でミスをして余計に苦しめることになる。一思いにやってあげることがせめてもの礼儀」と。この言葉を聞いた瞬間に不安はなくなり、視界がはつきりとなりました。包丁を持つ手は震えることなくスツと鶏の首に一太刀入れました。その時自然と「ごめん。ありがとう」と心の中で思いました。解体の実習が終わった日の晩御飯は自ら解体したブロイラーの肉を自ら調理し、家族にふるまいました。それを一口食べてみて、とても驚きました。いつもよりも格段に美味しかったのです。それは単に味付けや鮮度が原因ではなく、肉になるまでの過程を知っていることでより感謝して味わって食べようと思った認識の違いがそうさせたのだと思

います。認識の違いでここまで日々の食事を豊かにすることができるとも感銘を受けました。

私が思うに命とはどんな生き物でも等しく尊いものであるが、その尊い命は別の命の犠牲の上に成り立っていると考えています。犠牲になる命は決して軽くなくずしりと重いものだと思います。しかし、だからと言ってその命を常に悲観的に捉え、憐れむのは違うと思います。悲観的に捉えるより犠牲になってくれた命に感謝を込めて、その命の分まで生きていく。これこそが命に対する価値観であり、畜産科学科に所属しているものとして理解しておかなければいけないことだと思っています。この考え方は座学だけでは決して理解することができないものだと考えているので、私はこの実習を受けたことで、人生においてとても意味のある、重要なことを知ることができたと思いました。



高等学校の部 優秀賞

将来の夢

東京都立葛飾商業高等学校 三年

松崎 由佳

私の将来の夢は、ホテルに携わる仕事に就き、最高のおもてなしを提供するホテルマンになることだ。私に「ホテルマンになりたい。」「最高のおもてなしをしたい。」「そう思わせてくれたのは、高校二年の夏休みに出会ったホテルマンの方々だ。」

高校二年の夏休み、私は友達と栃木旅行のプランを立てた。「宇都宮ぎょうど」「夜食パーティー」など、旅行ならではの楽しみに当日までアルバイトや部活動、勉強を頑張った。中でも一番楽しみにしていたのがホテルである。なぜなら朝食や館内の雰囲気、部屋を楽しむのが好きだからだ。旅行当日、私たちは電車を乗り継ぎ、約三時間かけて目的地に辿り着いた。初日から観光を楽しむ予定だったが、二人とも移動で疲れ切っていたため、泣く泣く断念した。そんな私たちを最高な思い出へと導いてくれたのが、ホテルマンの方々である。チェックインの時から明るく話しかけてくださった上、私たちが疲れていることを察し、部屋まで荷物を運んでくださった。二泊三日の旅のため、大荷物だったにも関わらずサージビスして下さったことが、とても嬉しかった。その日は残

りの時間を、部屋で過ごして楽しんだ。次の日、朝食は調べておいたお店で食べることにした。しかし、定休日だった。ホテルの朝食は最終日だけ予約していたため、どうしようかと考えながら、一度ホテルに戻った。そのとき、私たちが朝食を食べに行くことを知っていたホテルマンの方が「おいしかったですか。」と話しかけてくださったため、事情を伝えた。すると「明日の朝食の予約を、本日に変更致しましょうか。」と提案してくださり、気分が下がり気味だった私たちには、その方が神様に見えた。朝食を終え、再び礼を言いに行った際、ホテルマンの方は笑顔で対応してくださった上、おすすめの見光地やお店まで教えてくださった。百二十パーセントの対応をしてくださったそのホテルマンに、私はいつの間にか憧れの心を抱いていた。

もう一つ、私がホテルマンを目指す理由がある。それは人と関わるのが好きだからだ。中学生までは、どちらかというと苦手だった。しかし、飲食店でアルバイトを始めた高校一年のとき、外国籍の方や目が不自由な方、耳が不自由な方などたくさんの人と出会い、さまざま「ありがとう」をもたらした。そのうち、人と関わり喜ばせ、笑顔にすることにやりがいを感じるようになり、手話や英語を勉強する機会となった。

私は「あのホテルマンのような素晴らしい対応で、最高のおもてなしをしたい。」「たくさんの人と出会い、その人たちの非日常空間をより良いものになりたい。」と思う。そのためには英語はもちろん、幅広い言語を習得し、手話やビジネスマナーの勉強をする必要がある。それに加え、専門的な知識

識も求められるため、決して楽な仕事とは言えないが、商業高校で学んだビジネスの知識を存分に発揮し、誰もが楽しめる空間を作れるようなホテルマンになりたい。そして少しでも「理想のホテルマン」に近づけるよう、努力していきたい。

人と心がつくるパティシエの世界

東京都立赤羽北桜高等学校 二年

野澤 萌音

私は調理師免許が取得できる専門高校に通っている。将来はパティシエになりたい。

この夢を抱くようになったきっかけは、自分が作ったお菓子を家族が美味しいと言って食べてくれたからだ。その姿を見て、自分の作ったお菓子で人を笑顔にしたいと強く思うようになった。その想いから、卒業と同時に調理師免許が取得できる高校に進学し、調理の知識や技術を学ぶことにした。

この高校では、調理に必要な栄養や衛生など知識の習得に加えて、実習を通じて多くの調理技術を身につけることができる。ほかにも、高校三年間で学ばなければいけない普通教科もある。普通科の高校生より忙しいし、大変なこともあるけれど、毎日が充実していてとても楽しい。そして、この夏五日間のインターンシップに行かせていただいた。

インターンシップの初日は総料理長から、料理人として大切にしてほしいことをお話していただいた。そこで、総料理

理事長は「お客様を大切にしてほしい」とおっしゃっていた。「料理人はお客様がいるから成り立つ職業である。知識や技術も大切だけど、その前にまずお客様のことを想ってほしい。」これは、現場で長く料理人をしてきたからこそ、本当に大切にしないといけないことだと思う。私もこの思いを胸に刻んでいこうと強く思った。

そして、厨房で驚かされたのは、パティシエたちの効率的かつ正確な作業だった。限られた時間の中で、多くのお菓子を製作しながらも、品質を一切妥協しない姿勢を貫いていた。私も最後の仕上げ作業をさせていただいた。すべて均一の量で同じ見栄えにするのは本当に難しかったし、時間も気にしなければいけないので効率よく作業するにはどうすれば良いか考えて行動することが出来た。これをやりこなしているパティシエの皆さんを尊敬するし、私もこうなりたいと強く思った。

インターシップを通じて、一番印象に残っているのは、お客様の目の前でシュークリームにクリームを絞る実演を経験させて頂いたことだ。この作業は、技術だけでなく、お客様とのコミュニケーションやおもてなしの心が求められる場面だった。お客様にとっては、一瞬の出来事かもしれない、その一瞬が特別な体験になるように接客をした。お客様の前で緊張しながらも、クリームを丁寧に絞り、お客様が喜んでくださる姿を見たとき、パティシエという仕事の素晴らしさを改めて感じた。お客様の笑顔や感謝の言葉を直接いただけた喜びは格別だった。また、お客様が笑顔で満足して帰っていく姿を見るたびに、プロフェッショナルとしてのやりがい

を強く感じた。お菓子を通じて人を笑顔にし、幸せにできる、この仕事に就きたいという思いが一層強まった。

今回のインターシップを通じて、お菓子は単に技術だけで成り立つものではなく、人と人との関わりがあつてこそ生まれるのだと実感した。パティシエ同士が連携をしながら作業を進め、お客様に喜んでもらうために、全員が心を一つにして取り組んでいる姿が印象的だった。また、お客様の目の前での実演を経験したことで、パティシエはお菓子を作ることだけが仕事ではなく、笑顔を届けるおもてなしの一環であることを深く理解した。私は、お客様が笑顔で直接くださる感謝の言葉、満足して帰っていく姿を忘れられない。あれほどうれしいことはないと思う。これらの経験を通じて、パティシエとしての道に進みたいと強く感じた。

将来は技術だけでなく、お客様に寄り添い、特別な時間を提供できるようなパティシエになりたい。今回のインターシップで得た学びと感動を胸に、これからも技術を磨き続け、夢を実現するために努力していきたい。自分の作ったお菓子でたくさんの人を笑顔にし、幸せになつてもらおう。私はこのインターシップの経験を活かし必ず夢を実現させる。



個人の努力とみんなの協力

岩倉高等学校 二年

鈴木将一

私は、幼い頃から鉄道が好きで、列車に乗って様々な場所へ出かけてきた。その中で、安全第一に努めるという使命を果たしながら、困っている方への配慮や、鉄道ファンの子どもたちに手を振るなどの温かいサービスもこなす鉄道員に憧れを抱いた。

このような経緯から、私は鉄道会社の下で行われる駅員のインターンシップに参加した。先述したように、私は鉄道好きのため、ある程度は駅員について知っていたが、実際は想像以上に大変だった。鉄道関連のアルバイトなどの経験もない私にとって難しく、失敗したこともあった。しかし、実際に失敗しないと実感しにくいようなことも経験し、多くのことを学ぶことができた。

私が今回のインターンシップで学んだことは、大きく二つある。

一つは、鉄道に関わる人々が様々な努力をしていることである。努力といっても様々なものがあるが、私は特に駅員の努力の大切さを知った。今回の体験で最も多く行ったのは、お客様対応だ。お客様から聞かれる内容は、行き先や乗り場、周辺のスポットまで多岐にわたった。しかも、お困りの方の多くが訪日観光客で、それらに英語で対応せねばならなかつ

た。私は、英語で話すことが苦手で、質問に対して英語で答えようと考え込み、お客様を待たせることになってしまった。実習中に、指導者の方から「英語が苦手でも、ジェスチャーなどを用いて相手に伝えようと努力しましょう」とアドバイスをいただいた。このことから、駅員は英語や知識を裏で必死に身に付けているだけでなく、現場でもお客様のために最善を尽くさねばならないと理解した。また、スマートフォンによって便利になった現代においても困っている方が多いことを知った。実習中、私はそのような人を見逃してしまうことがあったが、実際の駅員は、どんな人にも積極的に声をかけをし、本当に困っている人を次々に案内していた。私は、そのような姿を見習おうと思った。これらの訪日観光客を通じた経験は、将来空港アクセスを担う某鉄道会社への就職を目指す私にとって重要であり、とても良い経験だった。

もう一つ学んだことは、鉄道が多くの人の協力によって成り立っていることだ。普段「駅員」と一括りにしているが、その中でも様々な業務と役割があり、それら一つ一つに多くの人が関わっていた。実習中に会った人の中には、何か一つの業務に特化した人や運転士と駅員を兼任している人もいて、特徴も多種多様だった。このように自分に合った仕事を選択して、他の仕事をする人とも協力している現場を見てきた。これにより、ますます鉄道業界に興味を持つと同時に、改めてコミュニケーションの重要性を実感した。駅員どうしはもちろん、他の職種の人と会うたび「お疲れ様です」といった挨拶を交わしていて、私も実習中、常に実践した。当たり前のことのように思えるかもしれないが、私にとってこれこ

それが、企業の一体感を強めている一因だと感じ、社員が互いに協力している証でもあると分かった。

今回の実習で学んだことには、いずれも共通点がある。それは、アドバイスしていただいた内容と、学校で大切だと学んだ内容が直結していることである。学校での英語や言葉、地域についての学習、そして部活動において言われてきたコミュニケーションの重要性は、どれも私が目指すものに必要なことであった。したがって、私がすべきことは、今の学校生活に全力を尽くし、将来に必要な知識と技能を身に付けることだと思う。特に、上の立場の人から重要な点を教わることは、入社後も研修において多くの内容を学ぶ鉄道業を目指す私にとって、習慣づけるべきことである。だからこそ、私はこれから友達だけでなく、先生ともコミュニケーションを取っていく。このように努力して、私の理想の鉄道員を目指したい。

高等学校の部 佳作

夢

東京都立園芸高等学校 二年

小 西 昇 潤

園芸高校の実習を通して、農業の厳しさを実感しました。特に夏の実習は、炎天下で作業するため、非常に過酷である

ことを痛感しました。

農業においては後継者問題が深刻であり、未来を担う若者が少ない現状があります。日本全体では「働き方改革」などの動きがありますが、農業の現場では休む暇もなく、体への負担が大きい仕事です。特に伝統的な農業では天候や環境の変化に大きく左右され、近年の台風や天災によって、大きな影響を受けることが多いです。

最近では、室内での栽培が可能なサラダ野菜などが登場しており、技術の進歩が見られますが、米などの主食となる作物の栽培にはまだまだ課題が残っています。屋外での栽培は、自然環境に依存しており、収穫時期や作物の質にも影響を与えます。例えば、夏の実習ではキュウリを大量に収穫しましたが、形や大きさが商品として適さないものも多くありました。しかし、そのようなキュウリでも非常においしく、自然の恵みを感じ取ることができました。

私自身、将来農業に従事しようとは思っていません。現時点で自分の将来について明確な目標を持っているわけではありませんが、農業が抱える多くの問題について考えさせられました。農業は日本の食文化や経済にとって非常に重要な役割を果たしており、その維持と発展には様々な努力が必要です。高齢化や人口減少により、後継者が不足している現状では、農業の持続可能性が脅かされています。

さらに、近年の異常気象や気候変動により、農業は更に厳しい状況に追い込まれています。台風や豪雨による被害は年々増加しており、その度に農家の方々は多大な苦労を強いられています。技術の進歩により、環境に優しい農業や、効

率的な栽培方法が開発されているものの、それを支える人材が不足しているのが現状です。

また、農業の魅力を伝える努力も必要だと感じました。農業は大変な仕事ですが、自然と共に生き、作物を育てる喜びや達成感は計り知れませんが、特に実習を通じて、自分で収穫した作物を味わう瞬間は、何物にも代えがたい喜びでした。農業の魅力をもっと多くの人に伝え、次世代の農業を担う若者が増えることを願っています。

将来何をやりたいかはまだ決まっていますが、農業に対する理解を深めることができた実習は、私にとって非常に貴重な経験となりました。農業は日本の未来を支える重要な産業であり、その発展のために何ができるかを考えていく必要があります。この経験を活かし、自分の将来についても真剣に向かっていきたいと思っています。

私の学校では、フラワー装飾技能士と造園技能士のどちらかの資格が取れます。私はフラワー装飾技能士の資格を取りたいと考えています。なぜなら、この学校で初めてフラワーアレンジメントの授業を受けたときに個々の美しい花たちがデザインを加えることによって更に輝きが増し、感動を覚えたからです。

まとめとして、私は農業高校での経験を通して、農業の厳しさや課題を深く理解することができました。しかし、同時に農業の可能性や自然の美しさに触れることができたことは大きな収穫でした。

フラワーロスを減らしたい

東京都立農芸高等学校 二年

石松 花音

「えっ!! 花つてごみになってしまっんだ。」私がこう思ったのは高校一年生の夏、初めて行ったインターシップ先の花屋さんでのことでした。私は小さい頃から花を見るのも摘んで花束にするのも、花を飾るのも大好きでした。そこから、インターシップで花屋さんに行きたいと思い、参加しました。しかし、花屋さんでは汚れている花や売れ残った花材、水を吸収させるために切った茎、そしてフラワーアレンジメントなどをする際に取った葉など様々なものが廃棄されごみになっていました。私は小さい頃から花が好きだったため、この状況に驚きを隠せず、それと同時にとてもショックを受けました。このように花屋さんではたくさん廃棄が出てしまうことが分かりました。思い返してみると、私の所属している草花研究部でも、学校で学んでいる草花の授業でも、多くの花材を廃棄しています。

「これはなんとかして解決しなければならない問題だ。」と私は考えました。

使い終わって捨てられてしまう花について興味を持ち、家に帰って調べてみたところ、なんと花を年間約十億本も廃棄していて、経済的損失は年間約一五〇〇億円に上ることが分かりました。そして、このような花の廃棄を減らそうと動い

ている企業があることも知りました。ですが、私が参加した花屋さんのように、まだまだ普及していないのが現状です。

この花を廃棄しているという決して見過ごせない状態は花屋さんに限らず、花屋さんに花を卸している市場、また花を栽培している花き農家さんにも起っています。草花の授業では、フラワーロスが起る原因は二つあることを学びました。一つめは、プロダクトアウト型をしているということです。消費者のニーズに合わせるのではなく生産者が作りたいものを優先して生産するため花が余ってしまうのです。一つめは、コロナ禍によって花を使うイベントが少なくなったことです。これも一つめの理由と同じく花が余ります。二つめは、販売までの流通で花が悪くなるからです。生産された花はなまものであるため消費者の手に渡るまでに途中で花が萎れてしまったり、元々弱い茎が折れてしまったり花卉が汚れてしまったり、と見た目や花持ちが悪くなることで商品価値が下がり、売れにくくなるということも学びました。近年、食品ロスという言葉はよく耳にしますが、フラワーロスという言葉はあまり聞かないのではないのでしょうか。その理由は野菜や果物に比べ花は需要が低く生活に豊かさを生む産業だからです。その上、エディブルフラワーを除き大半の花は食用ではないため認知されないのです。しかし、フラワーロスもSDGsの問題が解決されていない、深刻な問題を抱えています。

このことから私は、今少ない企業が行っているこのままでは廃棄されてしまう花材を使って新しいものを作るという画期的な活動を世の中に広めていきたいと思いました。私の将来の夢は、ロスを減らす取り組みを積極的に行う花屋さんを

開くことです。花のロスを減らす取り組みについて私が将来実行してみようと考えていることが二つあります。一つめは買った花を長持ちできるものにするワークショップを開くことです。この取り組みは無料で行いポイント制にすることで次回以降も花を買ってくれると考えます。二つめは花屋さんの花のサブスクを始めることです。現在フラワーロスを意識して、花を使用した化粧品を作ったりしています。私はその場所に花を提供することをしていきたいと考えています。花屋でロスを減らすことも化粧品などを通じて花好きを増やすことも期待できます。

私は草花研究部や草花の授業、夏のインターシップの時花を捨てる度に心が痛んでいました。しかし今回ワークショップ防止対策を考え付いたので将来実行していきたいです。

畑から学ぶ

東京都立農業高等学校 二年

土屋風結

農業高校の農業科に通っている私たちは、一年生時から野菜、果樹、草花の実習がある。普通科高校では学べないことを学び、得たことがいくつもあると感じている。

まず、実習は努力が目に見える。頑張れば、立派な作物が収穫できるが、少しでもサボると作物の出来に反映し、はっ

きり見えてしまう。たとえば一年生のときに育てたキュウリを例にとると、最低でも週に一回は手入れが必要だ。余分な芽や葉を取り除く作業を怠ると、曲がって形が悪くなってしまふし、収穫時期を超えれば巨大で味も色も悪いキュウリになってしまふ。つまり、サボったことが一目瞭然なのだ。だからこそ手を抜かず最後まで取り組む姿勢が自然と身についた。暑い夏など、つい作業をサボりたくなるが、畑のことを思うと、自然と体が動くようになった。

実習レポートも大きな意義があると感じる。その日に学んだことをすぐに自分の頭で考え一枚の紙にまとめる。このルーティンから、どんな言葉を使って説明したら正しく理解してもらえるかと考え、語彙を獲得したり一枚の紙にまとめる力が身についてきたと感じる。

このように、一見すると農業とは関係ない分野でも学習成果があると思うのだ。

学業以外でも、得るものがあった。

その一つめが、「作物を収穫する」という喜びだ。自分の手で食べ物を作り出すことの素晴らしさは、農業高校だからこそ実感できた。もし普通科に進んでいたなら、私の人生でこんな喜びを知ることにはなかったのかもしれない。命あるものを自分で育て収穫し、家へ持ち帰る。家族に「こんなにたくさんあるの!？」と喜ばれ、「頑張ったね」とねぎらわれながら食べる家族そろっての夕食は至福の時間でもある。

二つめに得たものは、「誰かに感謝される」喜びだ。一年生のとき農業高校に併設された直売所で販売実習をした。猛暑の日も、雪が残る寒い日も、私たちの作った野菜や果物を

行列して買い求める近所の人たちの姿があった。それを見て、地域の方の気持ちの温かさを身にしみて感じた。「前に買った野菜と果物、美味しくてすぐ食べちゃったわよ」と感謝の気持ちを聞かせてくださったご婦人の笑顔は忘れられない。それからというもの、作物をさらにおいしくしたいという心意気が、ますます大きくなっていった。

三つめに、販売する前の「調整の大切さ」を知ることができたことだ。販売の事前準備といえば、商品を袋詰めするくらい、と思っていた。だが、想像を絶するほどたくさん準備項目があった。果物の選別は目視でしっかりとした確認が必要だ。小さすぎるものや、傷や変形があるものは、はじめて別のかごへ移す。作業に使う机や道具類はすべてアルコール消毒する。ナシの場合は柄の部分を持ち上げる作業が必要だし、破損しやすいブドウは緩衝材に包んだうえでパック詰めをする。

農業高校ではナシが「GAP」という認証制度のお墨付きを得ているが、その基準は厳しく、決められた道具だけを使うよう定められている。道具箱の中の秤やハサミなどの道具の数が合わなくてもアウトだ。そのような厳しいレギュレーションを厳守しなければGAPは維持できない。そもそもこのような制度があることを知れたのは農業高校での学びのおかげだし、GAPに求められる厳しい内容も、自ら携わることで実感できた。

屋外で手を動かし汗をかく実習は、私たち生徒はもちろん、指導する先生方も非常に労力がかかっているはずだ。だが、それを補って余りある実りをもたらしてくれていることを改

めて悟った。

私自身、この学校を選び、農業を学ぶことができてよかったと改めて感じている。

生きていくうえで「食」を切り離すことはできない。だから「食べ物」に対する実感を伴った学びは、将来どんな職業に就こうとも必ず役に立つはずだと確信している。

植物バイオを学ぶ、そして活かす

東京都立農業高等学校 二年

渡辺 智晴

農業高校に入学して一年が過ぎ、野菜や果樹などの実習にも大分慣れた頃に、私は二年生に進級し、新たな教科、植物バイオテクノロジーについて学び始めた。

私は中学生の時から、植物バイオについて詳しい知識はなくとも、理科の教科書やテレビのニュースを見て、興味を持っていた。特に、「品種改良」や、「遺伝子組み換え」、「新しい農業のかたち」などといった言葉は、まだ農業の道に進むか悩んでいた私から見てもまるで全人類に貢献する学問のようで、とても輝いて見えた。

そのため、私は「はたして、どんな凄いことを学ぶのだろうか。」と、期待する気持ちを胸に、初めての植物バイオの授業に挑んだ。

しかし、実際に授業を受けてみると、自分の思い描いてい

た「植物バイオ」のイメージとは、少し違うことに気付いた。

まず、授業の内容が、実験に使う用具の名称であったり、それらの扱い方などと一年生の化学で学んだことのように、肩透かしを食らったような気分だった。また、そのような授業が何度も続き「自分の学びたかったこと、やりたかったことはこういうことだったのだろうか。」と疑問を抱くようにもなっていた。しかし、そのような考えは、ある実習をきっかけに大きく変わった。

その実習は、無菌状態で植物体の調整、培養などを行う、クリーンベンチという器具を用いて、ユリの花を培養するといったものだった。この実習では、ユリの花の消毒から、メスでの花の切断、試験管内での保存まで、全て自力で行わなくてはいけなかったため、同じ実習班のクラスメイトと共に、一つ一つの動作にも注意しながら行った。

この実習を通して私が気づいたことは、今まで自分が疑問に思っていた授業の内容が実習の中でとても重要な知識だったことだ。例えば、液体の計量の仕方、クリーンベンチ内の器具の扱い方、果ては素材ごとの道具の洗い方でさえ、授業で学んでいた知識が必要だったのだ。このことに気付き、私は「なぜ植物バイオで、こんなことを学ぶのだろう。」と思っていた知識が本当は大きく関わっていると知り、今までの自分の考えを恥じつつ、学び、それを活かすことの重要性を改めて知ることができた。

このように、私はこの実習から、一見すると関わりのないような知識であっても、真剣に学び、それをどう活かしていくかが大切であると学ぶことができた。そして、何よりも、

自分のやりたかった、学びたかったことができたと達成感も大きくあった。

この実習以降、私はより一層植物バイオという分野に強く惹かれるようになった。そんな時、先生からとある推薦があった。それは、三年生の先輩が行っている、ダイズの根に生息している細菌を取り出し、培養、そしてどのような細菌なのかを解析するという、本格的な研究に参加しないか、というものだった。実習を通して植物バイオ、特に作物の生育に関わる微生物や細菌などについて興味を持ち始めていた私にとって、これは願ってもないことだった。そのため私は、すぐさま研究への参加を決意した。

その後私は、先輩や先生方から、実習で学んだことよりもさらに詳しい技術や知識を学んできた。そして、それらを活用しながら、栽培したダイズの観察や、菌を培養する培地の調製などを行った。まだ三年生のように複雑な作業はできていないが、研究に参加していくにつれて、段々と自分のスキルが上達していくことを実感でき、とても嬉しかった。

実習、そして研究を経験して、私はさらに植物バイオについて学んでいきたいと思うようになっていった。この先も、幅広く知識、技術を身につけ、上手く活かし、将来も私の興味のある植物バイオに携っていききたい。

保育士になるために頑張りたいこと

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

五十嵐 美月

私の将来の夢は、子どもと関わることができる保育士になることです。

私は小さい頃から子どもが好きで子どもを笑顔に出来る先生になりたいと思っていました。そんな先生になるために頑張りたいことがあります。

私は、人前に立ったり話したりするのが苦手で、すぐに緊張してしまいます。そんな自分を変えたくて中学生の時に小学校一年生から習っていたピアノを活かして音楽会のピアノの伴奏に挑戦しました。毎日毎日ピアノの練習をしたり、中学校の先生やピアノの先生にも協力してもらい練習を見てもらいました。音楽会本番では、すごく緊張したけれど練習どおりに弾くことができました。ピアノの伴奏に挑戦して自分に自信が少しつき、変えたい自分に少しずつ近づいてはいるけど、やはりまだまだだなと思いました。緊張しないようにするには、もっと人前に立ったり話したりする体験をたくさんすることが大切だなと思うので、これからはもっと積極的に人前に立ったり話したりしたいです。そして、少しでも克服できるように頑張りたいです。

高校二年生の夏休みに、保育園のボランティアに行きました。最初は一緒に遊んでくれるか不安だったけど、行ってみ

ると「お姉ちゃん」と近寄って来てすごく嬉しかったです。プールで水をかけあって遊んだりおもちゃと一緒に遊んだりしてすごく楽しかったです。また、手作りおもちゃを作って持って行ったときはみんな楽しそうに遊んでくれました。保育園のボランテアを通して楽しいことがたくさんあり、やっぱり子どもは可愛いくて、大好きだなと思い、保育士になりたいとより強く思いました。けれど保育園のボランテアに行ったら大変だったこともたくさんありました。おもちを取り合ってけんかをしてしまったり、お昼ご飯のときに友達と話していて全然食べなかつたり、お昼寝をしない子がいったりと、保育士はやはり大変だなと実感しました。また、子どもと遊んでいたときにけんかが始まってしまい、私はけんかを止めることが出来ませんでした。そのような経験を通してもっと子どものことをよく知り、学び、知識をつけることが大切だと思いました。

高校の保育の勉強では、子どもについてたくさん学び知識をつけたいです。夏休みのボランテアに行ったときに絵本を読んで、絵本の持ち方が分からなかったり声が小さかったりして上手く読むことが出来ませんでした。そのため高校で絵本を上手く読むコツや持ち方について学び、できるように頑張りたいです。高校の保育の実習でパネルシアターを作り保育園で発表するときは、緊張せずに堂々と発表出来るようにたくさん練習をしたいです。たくさんさんの自習をやることで保育の知識をつけ次の実習に活かせるように頑張りたいです。さらに私は、手話に興味があり耳の不自由な子どもたちと手話でお話が出来たらとても楽しいなと思いました。高校で

も手話の勉強をするので手話を出来るようにたくさん練習をしたいです。そして、耳の不自由な子どもたちと関わりたいなと思います。また、手話が出来るように頑張りたい、将来保育士になったら手話を子どもたちに教えられたらいいなと思います。

高校卒業後は、高校で学んだことを専門学校や短大で活かしていきたいと思っています。専門学校や短大でたくさん勉強をして実習をすることで、理想の保育士になれるように頑張りたいです。そのためには、今自分が克服しなくてはいけないこと、頑張らなくてはならないことを知り、少しでも出来るようにこれから意識して実習や勉強をしていきたいなと思います。理想の保育士になれるように頑張っていきたいです。

家庭科の先生

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

岡 部 風 沙

「家庭科の先生になりたい。」こう思ったのは私が瑞穂農芸高校に入学してからのことです。

元々私は、作業療法士を目指していました。むしろ家庭科は苦手な科目で、特に今選択授業をとっている「被服」はその中でも特に苦手な分野でした。そんな私が家庭科の教師を目指そうと思ったキッカケは、「被服」の授業でした。

生活デザイン科の授業には「調理」・「被服」・「保育福祉」の三つの専門的な授業があります。自分が中学生時代の頃は家庭科の中でも特に「被服」で扱う手縫いやミシンがとても苦手でした。それを授業でやることも分かっていたので、入学前は少し不安も感じていました。

瑞穂農芸高校に入学しようと思った理由として、保育福祉の内容の一つである手話や介護を深く学びたいと思ったからです。元々は作業療法士を希望していたため、その知識をより深めたいと思い入学しました。

生活デザイン科での高校生活が始まり、初めて専門科目の授業を受けたときは、被服だけがうまくいかずに苦手意識が払拭されないうままでした。しかし、一年生の二学期、私の意識は変わり始めました。

一年生の二学期からは、子供服作りが始まりました。裁断線を引いたり、接着芯をつけたりなど、今までになかったようなこともやり始めました。実際に裁断したり、ミシンを使ったり、手縫いをしたりすることはとても難しく、苦戦しました。けれど、その反面楽しさも芽生えていました。

最初は全くできなかつた手縫いやミシンも授業を重ねるごとにできるようになり、自分に自信がついたようにも思いますが。達成感を感じながらも、苦手な部分がよく見えるので、その点が自分を大きく成長させてくれたのだとも思います。

この自分の経験から、「もつといるんな人に被服の楽しさを伝えたい。」と思うようになり、家庭科の先生を目指すようになりました。

しかし、「普通科の家庭科の先生」だけではなく、「特別支

援学級」の家庭科の先生も同時に目指しています。

私の弟は生まれつき発達障害があり、私は弟のクラス見学などによく足を運んでいました。みんな優しく、目標にまっすぐな子ばかりでした。けれども、普通学級の子と比べられることもあり、少し謙虚すぎるところがある子もいました。

どんな子でも自信を持って欲しい。被服を通して自信をつけてもらいたい。そう強く思うようになりました。自分に自信がなかったからこそ、相手に自信を与えられる、そんな先生になりたいと思います。

高校を卒業してからは大学に入学し、夢を追いたいと思っています。しかし、被服系大学の中にも多くの学科があります。まだ学科を選ぶ所までにはいきつけていませんが、大学に入っても被服製作を続け、また国家資格の勉強ができる大学に入学したいと思っています。今後、興味のある大学の学園祭などにも足を運び、自分が一番行きたいと思える大学を見つきたいと考えています。

まだまだ将来働いた時のことや、生活、人間関係など、想像のつかないことがたくさんあります。ですから、今のうちに専門的な知識を固め、目の前の身近なことに細かな目標を立て、それを実行していこうと思います。

私の理想像である「家庭科の先生」に少しでも近づけるように、いろいろな知識を身に付けたり、わからないことは深く掘りしたり、家でも服を作るなどして、将来の自分が過去の頑張りを見返さずにはなかつたと思えるようにしたいです。

私の憧れ

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

岡部 友梨那

私の将来の夢は保育士になることです。小学生の頃からずっと変わらずこの夢を抱いています。私がこの夢を持つようになったきっかけは母の影響です。もともと保育士だった母を近くで見えてきて気づいたら憧れをもっていました。保育士という職業が私の夢であるけれど、誰かの役に立ちたい、誰かの役に立つような人になりたいという夢もありました。それが保育士という夢につながったのではないかなと思います。

私が今の高校に進学しようと決めたのも保育の道への大きな第一歩につながると思い進学しました。中学二年生の時、職場体験で保育園での体験をする予定でした。保育士という夢を持っていた私にとって、すごく嬉しい体験であるはずでした。しかしコロナ禍であったがために直前で中止になってしまい、とても悔しかった記憶があります。今年の夏、三年越しに保育園でのボランティアに行くことができました。中学二年生の時に行く予定だった保育園であり、卒業した保育園でもあります。ボランティアが始まるまではとても楽しみな気持ちとともに、とても心配な気持ちもありました。しかし実際に始まるととても大変だったけど楽しくて、今回のボランティアを通してもっと保育士になりたいという思いが強くなりました。この他にも福祉の分野としてデイサービス

センターでのボランティアも経験し、とても楽しくやることができている保育士だけでなく誰かの役に立つ、誰かの支えになるそういう人になりたいと思うようになりました。

この二つのボランティアを通して少し将来の夢についての考え方が変わりました。しかし保育の道に進みたいという思いは変わらず、やる前より強くなったような気がします。小学生の時に母に憧れて保育士を目指し始めてここまでこの思いがずっと変わることがないとは思っていませんでした。自分がここまで将来について考えて本気になりたいと思う職業は他にはないと思っています。保育園のボランティアに行つた際に「向いていると思うよ」、「応援してるよ、頑張つてね」とか言われた時すごく嬉しくて絶対保育士になろうと思います。ボランティアだったから楽しいことがたくさんあったと思うけれど、実際現場に立つたとき諦めない心でいれるようにしたいと思いました。

高校卒業後は専門学校に進学したいと考えています。大学や短期大学の選択肢があるということも知っています。しかし私は大学で四年間学び卒業し現場に立つより、専門学校で二年間学び少しでも早く現場に立つことで様々な経験ができると思っています。短期大学も二年間ですが専門的なことを集中して学びたいという思いがあるので専門学校に進学したいと思っています。そしてずっと夢である保育士になりたいと思っと思っています。保育士という職業に憧れを持った理由は母だけではありません。もともと身近に保育士の方がたくさんいたため、自分もこういう風になりたいなと思っっていたり、自分が保育園に通っていたときの担任の先生方にも憧れを

もっていたりしました。小さいながらにかっこいいなと思っていたのだと思います。その記憶があるからこそ小学生の時に保育士になりたいという夢ができたのだと思います。そんな記憶がなかったら、絶対に私は保育士になりたいと思ってもいなかっただろうし、誰かの役に立ちたいという強い思いもなかったのだろうと思います。私が憧れをもった方々のような人になれるように、大変なことも少しづつ乗り越えて頑張っていきたいなと思います。思うようにならなくても私の将来の夢が保育士ということは揺るがないと思います。自分が思い描く理想の保育士になるのは簡単ではないと思います。それでも小学生の時から抱いていた保育士という夢は絶対に叶えたいです。そのために様々なことに対して一生懸命になって頑張っていきたいと思います。

大島高校農林科で学んだこと

東京都立大島高等学校 三年

木村 琴音

高校での三年間は勉強や農業技術の習得だけではなく、自分の人生観や職業観に大きな影響を与える貴重な経験だった。私は高校で学んだことは、今後の人生において役立つと感じている。

初めて野菜を育てる作業に取り組んだ時、私はただ野菜が

成長していくのを楽しんでいた。しかし、時間が経つにつれ、野菜を育てるにあたって深い考え方やプロセスを考え始めた。野菜をただ育てるだけではなく、どうすればもっと良い野菜ができるのか、そしてそれを安定して収穫できる方法について考えるようになった。例えば、野菜を病気から守るためにはどんな対策が必要なのか、どんな害虫が付きやすいのかを学び、それに応じた対応を考えた。具体的には、アブラムシやコナジラミといった害虫が特定の野菜に影響を与えることを知り、その予防や駆除方法を学ぶことが重要だと感じた。また、農薬を使用するのか、自然な方法で害虫を防ぐのかといった選択においても、環境や作物への影響を考慮しながら決断する必要があった。これらの経験を通じて、野菜作りが単なる作業ではなく、多くの知識と判断が求められる仕事だということを理解した。

さらに、ただ収穫量を増やすだけでなく、品質を保ちつつ持続可能な農業を実現するための方法についても学んだ。例えば、土壌の健康を保つために輪作を取り入れることや、施肥のタイミングを計画的に行うことが、次の作物を良い状態で育てるために重要であることを学んだ。これにより、収穫量を安定させつつ、農業の持続可能性を高めることができる。農業は、自然との対話を必要とする作業であり、その環境に応じた柔軟な対応が求められる。この経験から、どのような職業においても、環境に合わせて最適な方法を見つけるための柔軟な思考と対応力が重要であることを学べた。

農林科の経験の中で、チームワークの重要性も強く感じた。畑作業や収穫の際には、クラスメイトと一緒に作業すること

が多く、その過程で協力の大切さを学んだ。私のクラスは女子生徒4人だけで、大規模な畑での収穫作業は、一人では到底やりきれないが、みんなで力を合わせることで効率的に進めることができた。仲間と協力し合いながら一つの目標に向かって努力することが、成果を上げるためには欠かせないことを実感した。この経験を通じて、社会に出てからも、チームワークを大切にしていけることが重要だということを学んだ。どんな職場であれ、協力して物事を進めることができる人間になりたいと考えている。

そして、農林科での学びの中で、最も大きな気づきとなったのは「食べ物の大切さ」である。自分たちで育てた野菜を収穫し、それを食卓に並べる喜びは、他には代えがたいものがある。日常生活の中で、何気なく口にしている食べ物、どれほどの手間と時間をかけて作られているのかを知ることができた。

そのことに気づいてからは、食材を無駄にしないようにしよう、という意識が強くなった。食べ物に対する感謝の気持ちを持つことが、これからの生活においても大切なことだと感じている。

大島高校での三年間で得た知識や経験は、これからの人生においても大きな財産となるだろう。この学校で学んだことを活かして、将来は自分の手で何かを育て、成長させる力を持ちたいと思っている。そして、その力を使って社会に貢献し、誰かの役に立つことができるような人間になりたいと考えている。

どんな職業に就くとしても、農業高校で学んだ「真剣に取

り組む姿勢」と「自然への感謝の心」を大切にしていきたい。これからもこの気持ちを胸に、未来に向かって前向きに進んでいきたいと強く思っている。

調理科で得たことと夢

東京都立赤羽北桜高等学校 二年

鈴木 美 亜

私は将来、調理師免許を持った管理栄養士になりたいと思っている。そのため初めから調理師になりたいとこの学校に入学したわけではない。調理師免許を取得するために学ぶことは将来大学や専門学校に進んだとき、また調理師、管理栄養士にならなくても絶対に役立つという思いがあったため、私は入学を志願した。

入学してからは、実習や、調理に関する座学、普通教科の勉強と、学ぶことが多く大変なことが多かった。しかし今は、自分自身に知識や技術がついて余裕が生まれ、一年前よりも充実した高校生活を送れている。また、料理を作ることがこんなに楽しいものなのだとこの一年を通して改めて実感することができた。家で料理をするときには味わえない楽しさがあり、この学校に入学していなかったらこの感情に気づくことはなく、何となく料理をしていたと思う。そして私はしっかりとした夢を見つけることができた。

その夢とは、調理師免許を持った管理栄養士という点では

同じだが、病院で働き、小さい子からお年寄りの方、すべての入院されている人においしく、栄養のあるご飯を食べてもらい、ご飯の時間を楽しいものにしてほしいという夢だ。実際に入院されている方のご飯は味が薄いなどあまり良い話を聞かず、姉が入院した時も同じようなことを言っていたのを思い出し、私ができることをやりたいと思うようになった。また、入院されている方は食べられるものが限られていたり、調理法が限られていたりする中でどうやったらおいしく、楽しくご飯の時間を過ごせるかを考えて、実行していききたかったからだ。

さらに、私は人が喜ぶ顔を見るのがとても好きだ。私がつくった料理で人を笑顔にしたいと思った。それが一番できるのがスクールレストランだと知った。大量調理をして、生徒や先生に提供するもので総合調理の科目だ。サービスの担当を行ったときに私たちが作った料理でたくさんのお客様の喜ぶ顔を見た。その時に、私たちが作ったもので人を喜ばすことができる、笑顔にできると知ることができた。

しかし、様々な理由で食べることが嫌い、食べることに喜びを感じないという人がこの日本や世界にはたくさんいると思う。アレルギーや食事に制限がある人、十分にご飯が食べられない人などだ。

私はそんな人たちの中で病院に入院されている方に焦点を当てた。病気を治す医者でもできなく、人が生きるために必要不可欠な食糧を確保することという観点で私は人を助けたい。入院生活で何かできないことがあっても、食べることを諦めてほしくない、嫌なことがあっても食べることで「明日からも頑

張ろう」と思ってはほしい。

だから私は病院で働き、小さい子からお年寄りの方、すべての入院されている方においしく、楽しくご飯を食べてもらう管理栄養士になりたい。そのために、これから多くの調理技術や栄養に関する知識を得て、卒業後は管理栄養士になるために日々勉強したい。そして、管理栄養士として学んだ知識と、調理の技術を活かして「入院されている方のご飯の時間をおいしく、楽しいものにする」夢を実現させたい。

夢への第一歩

東京都立赤羽北桜高等学校 二年

宮田 彩希

私は小学生の頃からパティシエになるのが夢だ。中学三年生になってもその気持ちは一切変わることはなく、お菓子作りが趣味で毎週末には何かしらスイーツを作っていた。進路を決めるとき、誰よりも好きなことを極めたい。そう思ったため、高校生のうちから調理について詳しく学べるこの高校に入学することを決意した。

小さな頃から、ウエディングケーキに興味があった私は、パティシエの中でもウエディングケーキを作るパティシエになりたいとなんとなく思っていた。しかし、その思いはインターンシップ後には完全に消えていた。

この高校に入学してから、厳しい現実をたくさん突きつけ

られた。特に私が苦戦しているのは毎学期末にある実技テストだ。一年生は炊飯、出汁の取り方、野菜の切り方、三枚おろしなど調理の基礎のテストがある。二年生になって今は調理した料理の見た目と味を見られるテストになった。一つ難易度が高く、みんな苦戦するテストがある。それは出汁巻き玉子だ。これは一年生の一学期と二年生の一学期の二回、テストがある。ただ、二年生では見られる観点が少し変わる。一年生の頃は使えた巻き簾が使えなくなるが、一年生の頃より、より四角く綺麗に焼かなければいけない。そして味も見られる。一、二年生共に一発で受かるのは、一、二人程度だ。

私は二年生の一学期の実技テストで印象に残った出来事がある。テスト本番、私ที่บ้านから持ってきた銅鍋は油慣らしが足りず、上手く焼くことができなかった。再試となり、周りのクラスメイトは味の評価で合格できない人が多くいた。私は再試一回目、見た目の悪さで落ち、リベンジの二回目、主任の先生に玉子焼きを見せに行った。端の方を切り、味の確認をしてもらった。そしたら先生は目を見て笑顔で、美味しい、と私に言ってくれた。少し涙が出てきた。私はそのとき、人に美味しいと言ってもらえる嬉しさをあらためて痛感した。

この高校は二年生の夏休みに五日間のインターンシップに全員行く。調理の学校だが、製菓志望の人が多いこともあり、何卒か製菓の枠があり、私は製菓部門に行かせていただいた。ウエディングパティシエになりたいと思っていたため、私は少し違うがホテルパティシエの現実が見られると思い、インターンシップをすごく楽しみにしていた。いざ始まり、厨房

に入ると朝早くから黙々と作業しているパティシエの方々がいた。丁寧の一つ一つ仕込んでいるパティシエの方々がものすごくかっこよく見えた。初日に私について指導して下さった方は指示を簡潔に済ませ、次から次へとケーキのナツペをすごいスピードで終わらせて、次のスイーツへ取りかかっていた。その方は入社して二年目の方だった。私は二年目でこんな作業ができるのか、とすごく驚いた。

最終日にはケーキを二つ食べさせていただいた。見た目が綺麗で感動した。でも食べたならその倍以上感動した。ずっと同じ味ではなく、食べ進んだら味が変わった。夢中になりながら食べて気が付いたらもう、食べ終わっていた。

実技テストでの出来事、そしてインターンシップ中に食べたケーキのことが忘れられず、私は見た目よりも味を一番重視したスイーツを作りたいと強く感じた。ウエディングケーキも、もちろん美味しくて見た目が圧倒されるくらい美しい。けれど私はやはり味で人を感動させたい。あの二年目のパティシエの方のようにホテルパティシエとしてスイーツに関わりたい。

私の夢がまた一步、具体的に決まった。高校を卒業したら製菓の学校に行き、本気でスイーツを学びに行く。将来は味で人を感動させるパティシエになる。

私の夢

東京都立赤羽北桜高等学校 二年

吉田彩乃

「料理でたくさんの人を笑顔にしたい。」この夢を持ち始めたのは、私が小学五年生の時です。母に慣れない手つきで作ったハンバーグを、美味しいと喜んで食べてくれたことがとても嬉しく、より多くの人に自分の料理を食べてもらいたいと思うようになり、この夢を持ち始めました。小学五年生から料理に関わる仕事がしたいという決意は固まっていた、中学校に入学してからもその思いは変わらず、高校では今まで以上に料理をしたいという気持ちが強くあったため、多くの時間を料理に費やすことのできる学校がないか探し出し、調理科のある赤羽北桜高校に出会うことができました。学校見学として中学三年生の夏休みにサマースクールに参加しました。そこには、私と同じように料理に興味のある人がたくさんいました。私の身近には、調理関係の仕事についている人がおらず、また料理に興味のある人はいなかったため、料理の道に進む人はあまりいないのだろうなと思っていたので、その光景にとっても驚きました。サマースクールでは、パウンドケーキを作りました。また、作るだけではなく、卵の性質や薄力粉、中力粉、強力粉の違いなど、料理をする上で必要な知識を学ぶ座学の時間もありました。これらの実習と座学の体験から、この学校に入学すれば、たくさん知識と技術

を身に付けることができ、料理にたくさん関わっていただけるのではないかと考え、この学校に入学したいと決意しました。そして入学のためにたくさん勉強し、現在に至っています。

高校に入ってから、実習が始まりました。初めは炊飯や出汁の取り方などの基礎を習いました。簡単そうに思えたこの作業はいざやってみるととても難しい作業でした。自宅では、主菜副菜を作る程度だったため、本格的な授業に驚きが隠せませんでした。ですが、私の夢であり、目指す調理師はたとえ簡単な作業でも手を抜いてはいけない、真剣に取り組まないといけないということが初めの授業から良く分かりました。それからの実習は自分ができることを自ら探し、友人と意見を共有しながら進めていきました。分からないことは分からないままにせず先生に聞いたり調べたりすることで解決するようになりました。初めて使う食材や、見たことのない器具など分からないことでいっぱいでしたが、自分から行動することを心掛け、分からないを分かるに変えていくことができました。

たくさん実習を終えていく中で、私は西洋料理を作る楽しさに気づき、段々と西洋料理の盛り付けの美しさや美味しさに惹かれていきました。校外学習でテーブルマナーを学ぶことや、インターンシップで高級ホテルを訪れる機会が何度かありました。多くの場所で西洋料理に関わる体験があったため、ますます洋食の調理師になりたいと思うようになりました。また、インターンシップで結婚式のあるホテルに行かせて頂き、婚礼に参加させて頂きました。そこで料理を召し上がって笑顔になっていたお客様、新郎新婦の様子を見て、

料理を通して人を笑顔にすることのできるブライダル調理師という素敵な仕事をしたいと心から思うことができました。人を笑顔にする方法はたくさんありますが、料理を通して人を笑顔にしたいという気持ちがインターンシップの体験を通してますます強くなりました。

これからの調理実習は、今まで通り意識して行ってきたことはもちろん、インターンシップで得た新しい知識を生かし、小さい頃から思い続けてきた料理でたくさんの人を笑顔にすることのできるような人、ブライダル調理師になれるように精一杯努力していきたいです。

寮生活と乗船実習から学んだこと

東京都立大島海洋国際高等学校 三年

辻井 初芽

人間生活において、「協力」は常に重要な役割を果たします。しかし、その本質を深く理解するには、実際にその体験を通じて学ぶことが不可欠です。私が大島海洋国際高校で過ごした寮生活と、実際に船員とともに船に乗り込み、寄港地まで行く乗船実習は、そのような体験の場となりました。これらの経験から、私は協力の本質が単に力を結集することだけではなく、時には意見の対立を乗り越え、他者を理解し、忍耐強く我慢することも含まれるということを学びました。それは自分だけではなくその場にいた全員に当てはまることだっ

たのではないかと考えます。

寮生活では、さまざまな背景を持つ生徒たちと共に生活する中で、意見の対立や価値観の違いが日常的に生じました。しかし、その中で私たちは互いの意見を尊重し、時には自分の意見を抑え、全体の利益を優先することの大切さを学びました。その結果、我々は困難を乗り越えて共通の目標に向かって進む力を身に付けることができました。

乗船実習では、この学びがさらに深まりました。乗船実習とは、船員としての職務を体験し、実際に船に乗り込み、寄港地までの航海を経験するというものです。この実習を通じて、協力とは互いの弱さや限界を認識し、それでも支え合いながら共通の目標に向かって進むこと、という意味を実感しました。船酔いに苦しむ仲間とそうでない仲間との間での協力のあり方、特に船酔いに強い人たちが自ら進んで苦しむ仲間の作業を引き受け、支え合う姿は印象的でした。

責任感についての学びも深まりました。ある時、寄港地に降りる際、一人の生徒が服装を間違えてしまいました。その結果、生徒全員が制服で回る予定が、実習着で回らざるを得なくなりました。これにより、集団行動における個人の責任の重さと影響力を痛感しました。この出来事は、一人一人の行動が集団全体に大きな影響を与えることを示し、全員がその事実を受け入れる必要があることを教えてくれました。それだけ集団では一人一人が大きな影響力を持つっていると実感したのです。この出来事は、一部の人の人にとっては不快な体験であったかもしれませんが、それを通じて私たちは個々の責任感と集団内での自己の役割について深く考える機会を得ま

した。

これらの経験から、協力の本質とは仲間と力を合わせるだけでなく、相手の状況を理解し、支え合うことだという新たな理解を得ました。そしてそれは社会に出た時や日常の人間関係において極めて重要であると確信しています。これらの経験を通じて、私は自分自身が大きく成長したと感じています。

また、個々人の行動が集団に及ぼす影響の大きさを教えてくれました。一人の小さなミスが全体に影響を与えることがあるため、自己の責任感を常に意識することが求められます。この教訓は、私たちが日常生活や職場で協力し合う上で非常に重要です。一人一人が自分の行動を見つめ直し、集団のために最善を尽くすことが、より良い結果を生み出すことに繋がります。

最後に、寮生活と乗船実習において学んだことは、単に学校の外での生活や仕事に役立つだけでなく、人としての成長と深い人間関係を築く上での基盤となりました。人間性の成長とは、自己を超え他者との関わりの中で見いだされるものです。私はこれからも、人間性を深め、社会に貢献できる人物として成長していきたいと思えます。寮生活や乗船実習の経験は私にとって、人生の航海における貴重な羅針盤となり、これからも私の進むべき方向を示してくれると考えます。

海から学んだ未来への羅針盤

東京都立大島海洋国際高等学校 三年

古 屋 心 渚

私の高校時代は、通常の学校生活とは一線を画す、海上での体験によって彩られました。一学年時に行った基礎航海の五日間から、二学年時の仙台と久慈への航海、新島沖での底釣り実習に至るまでの一四日間、これら全ての体験は、私の人生観、そして将来に対する考え方に深い影響を与えてきました。しかし、これらの経験の中でも、船酔いという挑戦は、私たちの海上生活において避けては通れない課題でした。船酔いは、船の揺れによって生じる体調不良で、私自身もその苦しみを何度も経験しました。特に、一学年時の基礎航海では、船酔いが日常的な仕事を遂行する上で大きな障害となりました。船上での日常の仕事は、航海の安全と成功に不可欠であるため、船酔いによる体調不良にもかかわらず、それらを超えることは非常に過酷なものでした。この経験は、困難な状況下での責任感とチームワークの重要性を私に教えてくれました。

この課題に対する解決策を見つけるため、私は二・三年時に、船酔いに関する「課題研究」に取り組みました。この研究では、船酔いの生理的なメカニズム、予防と対処のための戦略、そして船酔いが乗船生活にどのような影響を与えるかについて詳細に調査しました。このプロジェクトを通じて、

私は船酔いの原因を理解し、それを予防し軽減するための具体的な方法を学ぶことができました。また、この研究は、私たちの船上生活を向上させるだけでなく、船酔いの個人差などについて解明に近づけるものとなりました。

学習に対する心構えについても、船酔いとの闘いは日常生活においても大きな教訓を与えてくれました。学習面で、一時的な困難に直面した際にも、その中から何かを得るという姿勢を持ち続けることの重要性を実感しました。また、学習は単に知識を蓄えることだけでなく、それを実生活に応用し、自分自身や周囲の人々の生活を豊かにすることにもつながるということ学びました。船酔いという課題を乗り越える過程で、私は学習に対する新たな視点を得ることができました。海上での体験は、計り知れない価値があると同時に、私の人生の航路を照らし出す羅針盤となりました。これらの体験から学んだ教訓は、私が今後直面するであろうあらゆる課題に立ち向かい、それを乗り越える力を育むことになるでしょう。船酔いとの戦いは、単に海上での体調管理の問題を超え、未来に向けて自己成長の礎を築く貴重な経験となりました。

この学びの旅は、海上での具体的な技術や知識を超え、人生を豊かにするための意識を提供してくれました。学習に対する心構え、好奇心を持続させる重要性、そして、何よりも困難に立ち向かう勇氣は、私の人生観を形成する上で欠かせない要素となりました。船酔いという身体的な挑戦を通じて、心理的な強さと精神的な成長を遂げることができました。

これらの体験は、私が船上で過ごした日々だけでなく、これからの人生においても、常に私を導く灯台のような存在で

す。海上で学んだ教訓は、未来の仕事や日常生活においても応用可能であり、どんな環境下でも柔軟に対応し、前向きに取り組む姿勢を育む基盤となります。また、チームワークの重要性や共同生活から得られる相互理解の精神は、社会で生きる上での貴重な財産となりました。

この高校の海上での学びは、単なる航海技術や海洋知識の習得に留まらず、人間としての成長、内面的な強さの発見、そして未来への信念を育むものでした。船酔いとの闘いや「課題研究」は、その一部分に過ぎませんが、これらの体験全てが、私の人生を照らし、未知の海へと船出する勇氣を与えてくれました。海上での学びと冒険は、私にとって計り知れない価値があり、これからの人生を豊かにする羅針盤となるでしょう。

高校生活での人生観の変化

東京都立大島海洋国際高等学校 三年

宮城 武虎

私は海洋高校に通い、特に乗船実習という学校の所有する船での二週間の生活を通じて、多くの貴重な経験を積むことができました。この経験は、私の人生観や職業観、さらには自己の将来に対する考え方や心構えに大きな影響を与えました。

乗船実習は、普通の高校では得られない特別な経験でした。

二週間という短い期間ではありましたが、実際に船に乗り込み、海上での生活を体験することは非常に意義深いものでした。船上では、船員としての基本的な業務から始まり、航海術や機械の操作、さらには緊急時の対応まで、多岐にわたるスキルを学びました。最初は不安もありましたが、実際に海の上で働くことで、教室では学べない多くのことを体感しました。

例えば、航海中に天候が急変し、船が荒波に揺れる中で作業は非常に困難でした。しかし、その経験をを通じて、自然の厳しさとその中で冷静な判断の重要性を学びました。また、船上での生活は狭い空間での共同生活となるため、チームワークやコミュニケーションの重要性を強く感じました。仲間と協力し合い、困難を乗り越えることで、信頼関係が深まり、絆が強まったと実感しています。

乗船実習を通じて得た最も大きな教訓は、「挑戦することの大切さ」でした。海は予測困難な環境であり、常に新しい挑戦が待ち受けています。初めての航海では不安や恐怖がありました。それを乗り越えることで自信を得ることができました。この経験から、人生においても新しい挑戦を恐れずに受け入れることが大切だと感じました。

また、自然の偉大さと自分の小ささを実感することで、謙虚さと感謝の心を持つことの重要性についても学びました。大自然の中での生活は、日常生活では感じることもない多くの教訓を私に与えてくれました。これらの経験をを通じて、私は「学び続けること」の重要性を再認識しました。学び続けることが自己成長につながり、より豊かな人生を送るための

基盤となることを実感しました。

乗船実習を通じて、私は「働くこと」の意味について深く考えるようになりました。船上での業務は単に技術を学ぶだけでなく、他の船員との協力や信頼関係の構築、そして、自己の成長にもつながりました。この経験から、職業選択においては、自分の技術や知識を活かし、かつチームで協力しながら働く環境が自分に合っていると感じました。

また、船上での生活は厳しい一方で、達成感ややりがいを感じる瞬間もたくさんありました。特に、航海が無事に終了して、全員が安全に帰港できた時の喜びは格別でした。この経験をを通じて、働くことに対して「やりがい」を求める姿勢が形成されました。乗船実習を終えた後、私は船に関する仕事に興味を持つようになりました。船員や船の技術者、さらには海洋研究者など、自分のスキルと興味を活かせる職業に就きたいと考えるようになりました。

将来に対しては、まず自分の興味や得意分野を重視し、自分に合った職業を選ぶことが重要だと考えています。海洋高校での学びや乗船実習を通じて得たスキルを活かし、将来的には海洋関連の職業に就きたいと思っています。また、どのような職業に就くにせよ、常に学び続ける姿勢を持ち続けることが重要だと感じました。技術や知識は日々進化しており、それに追いつくためには自己研鑽が欠かせません。さらに、チームで働く際にはコミュニケーション能力や協調性が求められるため、自分自身の人間力も高めていく必要があると感じています。

看護学生

愛国高等学校 三年

酒 卷 優 華

私は准看護師試験受験資格取得を目指し愛国高等学校で学んでいます。これまで過ごした看護学生としての日々は大きな変化と成長をもたらしました。中学校卒業後すぐに選んだこの道をスタートした時は、期待と不安ばかりでしたが、今振り返ると学ぶ喜びと困難を通して看護職の奥深さを実感し、看護師を目指す決意が強まってきたように思います。

入学した当初は、まだ看護師という職業に対して漠然としたイメージしかもっていませんでした。四月から始まった授業で人体の構造や機能を学び基本的な技術を習いましたが、日々初めてのことで新鮮かつ興味深いものでした。それと同時に大量の情報と技術を短期間で習得しなければならぬというプレッシャーも感じました。様々な学内実習や授業を通して、看護師になる為には単なる知識や技術だけではなく、心のケアが出来る、人間としての成長や責任の自覚が必要であると痛感しました。

高校二年生になると、より実践的で専門的な学びが始まりました。特に病院実習は、初めて患者様に対して基本的な看護を提供する中で実際の現場を目の当たりにし、教室での学びを結びつけられる大きな転機となったと思います。患者様

に合わせた観察やケアの立案を実践することに苦勞しながら、実習先の指導者さんや学校の先生方、仲間の助けを借りながら繰り返し返していく中で少しずつでも個別性のある看護提供へ自信が付いたように思います。この実習を通して、看護は単に患者様の病気を治す手伝いをするだけでなく、患者様の生活の質を向上させるサポートをする為に、患者様との信頼関係を築くことが何よりも大切であると実感しました。

現在、私は高校生活最後となる二か月の病院実習を控えています。これまでの基本的な学びを実践出来る機会でもあります。単なる技術の確認だけでなく、学生であったとしても看護の道を志す上での倫理観や判断力、患者様とのコミュニケーション能力も試されてくると思います。座学では味わえない医療スタッフの方々との連携も学び、自分の力に繋がっていきたいです。その為に三つの具体的な目標を掲げました。一つめは患者様が安心感をもってもらえるコミュニケーションを心掛けることです。患者様の不安を軽減し、信頼関係を築くコミュニケーションを大切にしたいです。二つめは臨床判断力を向上させることです。緊急性や様々な症例の中、迅速かつ適切な判断のもとで現場が動くさまを学びたいです。三つめはチームワークの重要性を再確認し、他の医療スタッフの方々との連携を深めることです。実習を通して、患者様へより良い看護ケアを提供できる為の、連携スキルを身に付けたいと考えています。この他にも、実際の現場での経験を通じて看護学生として自分の限界や課題を認識し、それを克服する為の方法を見つけていることが目標です。実習中には、予期せぬ状況や困難に直面することもありますが、

努力を惜しまないようにしたいです。また、私はまだ看護学生である為、自己判断は禁物です。患者様のことは指導者さんへの報告を大切にしながら、多くのアドバイスを頂き、自分自身に吸収していきたいと考えています。また教室では得られない貴重な知識を得て、自分の看護師像をより明確なものにしたいと思います。

高校卒業後、私は正看護師を目指す為に上級併設学校である衛生看護専攻科に進学し、さらに知識や技術を高めたいです。看護師になることは決して簡単なことではありませんが、漠然とした夢であったものが、現在看護学生として歩み始める中で、自分の成長や変化を実感し驚きつつも、努力すれば叶うということを実感することも出来ました。准看護師試験に合格出来れば、有資格者となり日頃からより一層の責任ある行動が求められると思います。今できることにこれから満足することなく努力をしていきたいと思えます。

患者様との関わり

愛国高等学校 三年

南指原 歩 未

臨地実習で患者様を受け持たせていただいて九日目。朝病室に伺うと、「もう学生来なくていいよ。」と言い放つように患者様がおっしゃいました。

高校三年生になり、本格的な病院実習が始まりました。一、二年生の時とは違い、実際に患者様を受け持った実習

は、不安と緊張がとても大きなものでした。そんな中で一番初めに受け持たせていただいた患者様が、冒頭に書いたA氏でした。

A氏の主疾患は左下肢動脈硬化症で、手術はまだ予定の段階でした。表情は痛みにより固く、体は痩せ型で色調もよくなく、起き上がることもままならない状態のA氏を目にし、適切な声掛けができるだろうか、効果的なケアは何だろうか、どんな不安や疑問が湧き上がりました。しかし、少しでも痛みを取り除きA氏に和らいだ表情になつてもらいたいと強く思い始めてもいました。A氏の左脚患部の痛みの程度は、1〜10で表すと7や8で時に痛み止めを服用していましたが、患部に炎症が起きているせいか、常に微熱と発熱を繰り返しているような状態でした。指導者さんや先生と一緒に時には何とか体を起こしてケアを実施させてくださいました。私が一人で情報収集とコミュニケーションに伺った時には、反応がなかったり背を向けられてしまったりということがありました。その度に私は「また来ます。失礼致します。」と言って退室していました。今思い返せば、気の利いた言葉掛けが足りなかった、痛みを緩和したいという思いが足りなかったと反省しています。

ドクターの回診があった時、ドクターが何を聞き、どのような処置を行ったのかをA氏にお聞きしたいと思いましたが、A氏は「今巻いた包帯がきつくて痛い。痛み止めをちょうだい。」と言い、私の質問に答えてくださいませんでした。そして、「痛み止めを持って来てくれないなら、もう来ないでくれよ。」と怒り混じりの声でおっしゃいました。

治まらない痛みがずっと続いている中、独りでいることが多いA氏にとって、私は目障りだったのかもしれない。私はその日から、透析後の疲れや痛み止めの服薬の状態を見て、訪室のタイミングを考えながら行動するようになりました。そんな中、一日の終わりに挨拶に伺うと「お疲れ様。また明日ね。」など、少しずつではありますがA氏が私に向き合ってくださる姿が見られるようになりました。このような関係の構築に時間がかかってはいましたが、A氏からの言葉一つ一つを大切にしたいと私は思いました。

しかし、受け持ちから九日目、冒頭の言葉をぶつけられたのです。動揺して頭が真っ白になった私は、「看護師さんと相談してきます。」と言って病室を飛び出してしまいました。A氏はバイパス術だった当初の予定が急遽切断となってしまうたそう、そのショックもあるのだろうと指導者さんから言われました。そしてそのまま、私の担当する患者様は変更になってしまいました。

しばらくして、「学生さんにきつい態度を取ってしまったことを謝りたい」とA氏が言っていると指導者さんからお聞きしました。短い期間ではありませんでしたが、A氏からは多くのことを学ばせていただきました。私は情報収集や看護ケアのことばかりを主として関わっていて、A氏の立場や気持ちに寄り添うことができていなかったのではないかと。私の声がA氏に届いていないと感じたのは、A氏の不安や痛み、葛藤などといった心に気付けていなかったからなのではないか。声掛けに返答がなかったり拒否されてしまったらというのとはとても辛いことではありましたが、何よりも大切な患者様との

コミュニケーションにおいて、この経験は必ず大きな糧となるに違いないと、私は心から感じていきます。

助産師という私の夢

愛国高等学校 一年

松原 ひなた

私が通う愛国高校衛生看護科では、本校の上級学校に行くことで専門学校や大学から学ぶ人より一年早く正看護師の国家試験を受けられる資格が手に入り、高校三年時には准看護師試験を行います。そのため、高校一年時から専門的な学習を行い、ベッドメイキングや足浴などの技術的なことを身につけます。

私には叶えたい夢があります。それは助産師になって赤ちゃんやお母さんの支えになりたいという夢です。

私がこの夢を持つきっかけとなったのは、『コウノドリ』というドラマと妹の存在です。

『コウノドリ』というドラマは産科医療がテーマのドラマで、妊婦とその家族を中心にストーリーが展開されています。放送当時はまだ九歳でしたが、小学生ながらに感動した場面が数えきれないほどありました。その中でも、あるベテラン助産師の存在が私にとっても大きな影響を与えました。

私は「痛みの分かる人」が医療従事者にとって必要な資質だと考えています。このベテラン助産師の方は毅然とした態度

度やどんな人の懐にも入れる親しみやすさ、聞き上手な点など、まさに痛みを共感することができると理想的な助産師さんだと思えます。この方の台詞の中で、「当たり前前のことができなくても当たり前前じゃん。だってまだ親子になって三日なんだもん。お母さんも赤ちゃんも初心者なんだよ。」というものがあります。この言葉からお母さんやその家族に対しても寄り添って共感していることが良く伝わります。そんな姿を見て、私も助産師として、痛みを理解し寄り添えるひとなりたい、赤ちゃんやお母さん、その家族も支えられる人になりたいと考えるようになりました。

もう一つのきっかけである妹は私が小学校六年生の時に産まれました。私は妹が生まれる前に沢山の本を読み、難しいことも調べながら妹のために精一杯準備をしていました。母の検診に付き添った際、てきぱきと働いていた助産師さんの姿にとても驚きました。手際よく仕事をしながらも、妊婦さんやその家族の方への気配りも行っていました。そして、病院のお医者さんや助産師さんからは一人一人に寄り添う姿勢が感じられました。助産師さんに様々なことを質問したいと思っていました。新型コロナウイルスの影響で院内への立ち入りが禁止されてしまいました。検診に付き添うことができずに出産予定日になりました。出産当日、学校から帰ると父が慌てた様子で、私は何が何だか分からないまま車に乗りました。その時、母の通っていた病院では対処ができない事態が発生し、母は大きな病院に救急車で運ばれ、緊急帝王切開の手術を行うことになりました。私と父が病院について三時間程待っていると、看護師さんに呼ばれました。手術は成

功し、妹も母も無事でした。緊急の手術だったので院内に入ることができ、産まれてきた妹にすぐに対面しました。あの時の可愛さをいまでも覚えていきます。と同時に、本当に二人とも無事でよかったと安心したことも忘れられません。出産後、コロナ禍の中での入院生活で母は大変だったそうです。入院中の助産師の皆さんは感染対策などにも心を配りながらサポートしてくれたことが、母にとっても頼りになる存在だったと教えてくれました。

このようなきっかけを通じて、私は助産師という夢を志しました。その中で高校から看護について学ぶことができる本校に出会いました。本校では二年生から実際に病院に行き、患者様に接することができる実習があります。その実習では現場の仕事をしっかりと吸収できるように、今から看護師としての知識や技術を学んでいきます。お母さんやご家族を尊重し、安心安全に出産できる助産師になるために、日々学習に励んでいきます。

人と人の繋がり大切さ

羽田国際高等学校 一年

立川 彩乃

私はこの夏休みに四か所の施設にボランティアとして参加しました。きっかけは友達に誘われたからです。私は今までボランティア活動をしたことがなかったので、この機会に

チャレンジしてみようと思っていました。しかし、ボランティア募集一覧表を社会福祉協議会の方に見せてもらったとき、あまりの種類の多さに驚きました。お祭りの模擬店の売り子に敬老会お祝いの準備、子ども食堂などたくさんの仕事がありました。私が実際に体験したもので特に印象に残ったのが、保育園にボランティアとして二日間参加したことです。

八月十四日、台風前の猛暑日、私は家族や親戚に自分より年下の子ともがいなかったもので、どのように子どもと接すればいいのかわからず、上手くいくか不安な気持ちで保育園を訪問しました。今回私が担当することになったのは二歳児のクラスでした。部屋に入るとおもちゃではしゃぎながら子どもたちが遊んでいました。お盆の時期ということもあって人数は普段より少ないようですが、私にとっては多く感じました。床に座っているとすぐに子どもたちがおもちゃを持ちながら私のもとに集まってきました。よく喋る子や簡単な言葉しか喋れない子、電車が好きな子やブロックを組み立てるのが好きな子、さまざまなおもちゃがありました。私から話しかけないと全然喋らない子がいたので、子どもたちがアクションを起こすたびに「これなあに？」と言ったり、よく共感してあげたり、褒めたりすることを意識しました。おやつや時間や昼食の時間になると、ご飯の準備を保育士の方がしていたのですが、その時にあまり保育士のお手伝いをできなかったのが後悔です。

八月十五日も前日に引き続き同じ保育園に行きました。前日の反省として今日は保育士の方から指示されるまで待つのではなく、自分から仕事を見つけて保育士の方のお手伝いを

することを意識しました。また、保育士の方の子どもたちに対する接し方を見て、どのようにしたら子どもたちに好かれるのかを学んだので、自分なりに真似してみました。その結果、一部を任せられることもあって嬉しかったです。

私はボランティア活動を通してさまざまなことを学びました。まず一つめが施設側の視点から見て、ボランティアに参加してくれる方のありがたさです。施設によって内容も忙しさも異なりますが、ボランティアが終わったあとに施設の方に「ありがとう」や「助かりました」と感謝を伝えられるのがとても嬉しかったです。二つめが自分のやりたいことが見つかるということです。私はもともと心理学や人間福祉に興味があったのですが、浅くしか知らなかったので深く知るきっかけとなりました。他にも地域が良くなったり、新しい技術や能力を身につけられるメリットがあると分かりました。何よりも、ボランティアは人と人の繋がりによって作られているものであり、そこからさらに出会いがあるので、その重要性に気づかされました。

今回ボランティアに参加したことは私に大きな影響を与え、将来の選択肢を増やしてくれました。来年も参加したいと思える充実した夏休みとなりました。



人を笑顔にできる仕事

国際公立学園高等専修学校 三年

伊藤 栞奈

「いらっしゃいませ。」

「ありがとうございます。」

お客様が晴れやかな表情でお店を後にしました。この言葉は私がアルバイトをしているケーキ屋さんで全員がお客様に向けて言うものです。他のお店と違うところは、販売の人だけでなく製造で働く人たちも感謝の気持ちを伝えることです。また、「スイーツは、お祝い事のときやご褒美のときだけじゃなくて、嫌な事があったときに人を支える存在になれるのよ。」と先輩が教えて下さりました。初めてのアルバイトに緊張してなかなか声を出せなかった私ですが、この言葉をきっかけに、今では声をしっかりと出し、販売も任せていただけるようになりました。

私は製菓衛生師と調理師の二つの免許が取れる高等専修学校に通っています。二年生と三年生では、有名ホテルへの一週間のインターンシップがありました。初めての現場、大きなホテルだけあって一日働くだけでも疲労が大きく過酷なものでした。ミスをできないプレッシャーや一度に大量に仕込むという仕事の厳しさを感じました。その一方で、任せられたケーキの盛り付けが完成した時の感動や、ドロップパーで百個近いムースを流し終えた達成感は感慨深いものがありました。

た。「この仕事は任せられるね。」と褒められ、パティシエという仕事を選んで良かったと思いました。

私は小さい頃から様々な夢を持っていました。例えば、ずっと大好きなテーマパークのキャストや母と同じ保育士の仕事、動物園の飼育員などです。本当に幼い時はペンギンになりたいと言っている時期もありました。一見バラバラに見えるこの夢ですが、全てに共通するものがあると気が付きました。それは「人を笑顔にできる仕事」というものでした。

今、私は高校三年生となり就職活動を始めなければいけません。学生から社会人に変化する、人生の中でも大きなターニングポイントに立っていると思います。大きなホテルから町の小さなケーキ屋さんまで経験し、どっちに就職しようか迷っていました。しかし、幼い頃からの「お客様の笑顔」というキーワードが私の中で大きな決め手となりました。二つの大きな違いはお客様の笑顔を目の当たりにできるかどうかでした。ホテルでは、製造と販売が分かれており、実際に見ることは難しいと思いました。個人店では、笑顔を見ることができなく、直接感謝も伝えられると感じました。また、特注ケーキで一人一人に寄りそうこともできる最高の職場だと思いました。

私の夢のゴールはパティシエになることでは留まらず、海外でパティスリーのお店を持つことです。五歳まで住んでいたアメリカに帰って日本のおいしいスイーツを届けたいです。まだまだ、学ぶことが多く簡単な道ではないと思いますが、若いうちに関心を出られる学校の利点を生かして頑張りたいです。作ることや働くことの楽しさを忘れず前進していきます。

専修学校の部 優秀賞

食を通じた誰一人取り残されない 優しい世界を目指して

吉祥寺二葉栄養調理専門職学校 一年

島田佳絵

私は、高校を卒業してから約二十年間、社会人としてパティシエを生業に食の業界で従事してきた。年齢を重ねれば重ねるほど、食の在り方に重きを置くようになり、ただ美味しいだけでなく、より安全で健康に良いお菓子を作りたいという志が自分の中で芽生え、改めて知識を深めたいと思い、この四月から栄養士の専門学校へ社会人入学をした。

職業人としてのキャリアを一旦置き、学生が主体となった今、今まで見えていなかった世界が見えてくるようになった。病気や障害があり、栄養摂取に細やかな配慮が必要な人々の存在だ。ホテルでパティシエとして勤務をしていた頃、アレルギーのある小さな子供を持つ親御様から、アレルギー除去食の対応ケーキの依頼を受け自分が作らせて頂く機会に恵まれたことがあった。パティシエとして初めての試みで、一歩間違えば大きな事故にも繋がるのでとても責任と緊張が伴う作業であった。何回もシミュレーションをし、取り扱う器具にも細心の注意を払い、何とか注文を頂いたケーキを作り

届けることが出来た。

その時はお子様も親御様もとても喜んで頂けたし、何よりも無事故で作れたことに安堵した。一方でもっと私に出来ることはないかと考えがよぎった。クリスマスケーキということで見栄えと安全性は重視したが、それらに加えて、味や食感、そして栄養価などについても追求出来る部分があるのではないかと、ふと立ち止まるきっかけとなったのだ。栄養という観点から、より知識を深め、必要としている方々に栄養と健康を絡めたお菓子を作りたいと、自分の進むべき道と夢が鮮明に浮き上がってきた。

専門学校に入学して、まだ一部分ではあるが、食物アレルギーについて触れる授業があった。驚いたことの一つに、食品別のアレルギーの多さがある。そして、患者だけでなく特に小さな子供を抱える保護者にとっても食生活に対する悩みは深いということであった。私自身も、現在、保育園児を育てる母でもある。栄養士という仕事は、「患者あるいは保護者の抱える食生活に関する悩みを受け止め、その内容を理解し、解消するための情報提供や支援を行う」という文章を目にした時に、私は今まで培ってきた経験と技術を、栄養学を学ぶことで、実践と理論を更に深く探究していきたい、自分の専門領域を拡げていきたいと強く思うようになった。

実際に専門学校の授業で、知識や最新の知見を先生方から教授して頂く度に、学術的な理論知と、自分の今までの実践知が重なり合うことが多々あり、とても嬉しく思う。そして、大人になってからの学びを、今こうして楽しいと思えている自分がいるのだ。この専門学校での学びを、食を通じて社会

還元していき、アレルギー疾患を代表とした病気のある方も含む人々を食で幸せにしたい、必要としている方たちに寄り添いたいと考えている。

食を通じた誰一人取り残さない世界を目指して、自分自身が出来ることを、一步一步、確実に役立てて行きたい。そして全ての人が幸せな食生活を送れる優しい世界を目指していきたい。

雲外蒼天

ハリウッド美容専門学校 一年

渡邊 真衣

私の将来の夢はヘアメイクアップアーティストになることだ。その理由は、「沢山の人を美しくして、幸せになってもらいたいから」ではない。私は幼い頃からコスメが好きで、親にねだってキッズコスメを買ってもらったり、母の化粧品を勝手に使ってメイクをしたりして遊んでいた。高校生になってからはアルバイト代をほとんどコスメ購入に充てたり、SNSでメイク動画を見ながら真似をして練習したりするほどだった。更に私は昔から音楽も好きで、様々なジャンルの曲を聴き漁っていた時、たまたまヴィジュアル系というジャンルに出会い、衝撃を受けた。そして、「私もこんな美しくカッコいいメイクが出来るようになりたい」とヘアメイクの仕事に興味を持つようになった。

しかし、私は小学生の頃から容姿のことでイジメを受けており、教科書を盗まれたり、廊下ですれ違いざまに悪口を言われたり、校庭で石を投げつけられたり、泥水をかけられたりした。更に父親からも、スキンケアをしている時に「お前みたいな人間はそんなことをしても無駄」と容姿を批判されていた。そんな経験から、私は自分の容姿に自信がなく「私みたいなブスが美容の道に進みたいなんて言ったら馬鹿にされる」と夢を諦めてしまっていた。だが他にやりたいこともなく、娯楽業、小売業、清掃業、警備業と、色々な仕事に手を出してはみたが、結局どれもやりがいを感じず長くは続かなかった。そして、そんな怠惰に生きている自分に激しい自己嫌悪を覚えた。今はまだ若いから仕事にありつけているものの、フリーターのような生活をしている何の取り柄もない私のような人間は、このままでは就職すら困難になってしまうのだろうか。そんな自問自答を繰り返しながら、自分の中にあるわずかなものを拾い集めたら、残っていたのは幼い頃から変わらない『ただのコスメ好き』だけだった。

私は今年で二十七歳。今更夢を追いかけるなんて遅いんじゃないかと悩みもした。しかし、このまま夢を諦めてしまつたら、私は一生自分のことを嫌いなままだ。それにきつと後悔もする。だから、「成功しなくてもせめて悔いのない人生を送りたい」と、一度は諦めた夢に挑戦することを決意した。それからは沢山の美容専門学校のオープンキャンパスや説明会に参加するなどして情報を集めていった。私は大勢の高校生の中で異様な八年遅れの参加者だった。受験する学校を決

め、願書を提出し、試験当日に面接官は言った。「年の離れた子たちと勉強することになるが不安はないか？」全く不安がないと言えば嘘になる。「それでももうこの道しかないのです！」と言うしかなかった。その思いが通じてか、希望の美容専門学校に合格した。無知なままで飛び込んだ学校の授業は「基本のキ」から面白かった。好きなことを学ぶのはこんなにも楽しいのかと思った。これまでのどの学校より、学ぶことの喜びを知った。試験の結果によって、美容コンテストに出場する選手候補にも選ばれ、努力が報われたようで嬉しかった。しかし、楽しいことばかりではない。自分に自由にメイクするのと、検定に向けて時間を計りながら他人にメイクを施すのでは勝手が違う。手が震えて思い通りにメイクが出来ず、悔しい思いをしたこともある。もちろん、夢を追う上で困難があることなどは重々承知の上だ。出来ないことはやらない理由にはならない。私はもう二度と何のために生きていくのか分からない惨めな生活に戻りたくないのだ。私はいじめられた経験から、今でも人と関わるのが苦手だ。それはヘアメイクアーティストとして重大な欠陥かもしれない。それでも、私は悔いのない人生を送るために、自分のことを認めてあげるために、自分のことを好きになるために、ヘアメイクアップアーティストになるという夢を叶えたい。

イラストの部 イラスト賞

「明日に生きる」第三十五号

表紙デザイン

台東区立駒形中学校 三年

山崎 茉 紘



表彰式（令和6年12月20日、東京商工会議所）



表彰状及び賞品授与



作文朗読：中学校の部（菅生すみれさん）



作文朗読：高等学校の部（稲垣琥大さん）



講評：中学校の部（矢島加都美委員長）



講評：高校・専修学校等の部（智片将也委員長）



祝辞：東京都産業教育振興会
（西澤宏繁会長）



祝辞：東京都教育委員会
（長谷克己ものづくり教育推進担当課長）

令和6年度作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）

〈中学校の部〉

番号	区分	学校名	応募者数	入選者数
1	新宿区	新宿西戸山中学校	1	
2	文京区	第八中学校	10	1
3	墨田区	両国中学校	10	2
4	品川区	八潮学園	1	
5	大田区	大森第六中学校	10	1
6	世田谷区	尾山台中学校	7	1
7	中野区	中野東中学校	10	1
8	杉並区	井荻中学校	1	1
9		泉南中学校	10	2
10	北区	稲付中学校	4	
11		赤羽岩淵中学校	10	3
12	練馬区	豊浜中学校	9	
13	足立区	第十二中学校	10	
14		江南中学校	1	
15	葛飾区	葛美中学校	9	
16		亀有中学校	2	1
17		高砂中学校	7	1
18	江戸川区	小松川第二中学校	1	1
19		二之江中学校	5	
20	調布市	第八中学校	10	1
21	町田市	真光寺中学校	10	
22	国分寺市	第四中学校	10	4
23	三宅村	三宅中学校	10	1
24	東京都立	両国高等学校附属中学校	10	2
25		武蔵高等学校附属中学校	8	2
26		大泉高等学校附属中学校	4	2
27	私立	愛国中学校	2	
中学校 小計			178	27

〈イラストの部〉

番号	学校名	応募者数	入選者数
1	東京都立世田谷総合高等学校	1	
2	台東区立駒形中学校	4	1
合計		5	1

〈高等学校・専修学校等の部〉

番号	学校名	応募者数	入選者数
1	東京都立園芸高等学校 全日制課程	10	
2	東京都立園芸高等学校 定時制課程	8	1
3	東京都立農芸高等学校	9	1
4	東京都立農産高等学校	7	
5	東京都立農業高等学校 全日制課程	10	2
6	東京都立農業高等学校 定時制課程	1	
7	東京都立瑞穂農芸高等学校	10	4
8	東京都立大島高等学校	4	1
9	東京都立八丈高等学校	2	
10	東京都立蔵前工科高等学校	10	
11	東京都立第三商業高等学校	8	
12	東京都立葛飾商業高等学校	10	1
13	東京都立忍岡高等学校	10	
14	東京都立赤羽北桜高等学校	10	4
15	東京都立大島海洋国際高等学校	10	3
16	東京科学大学附属科学技術高等学校	1	
17	愛国高等学校	10	3
18	岩倉高等学校	4	1
19	東京実業高等学校	1	
20	羽田国際高等学校	10	1
21	国際共立学園高等専修学校	10	1
小計		155	23
1	青山製図専門学校	10	
2	吉祥寺二葉栄養調理専門職学校	1	1
3	ハリウッド美容専門学校	1	1
小計		12	2
合計		345	52

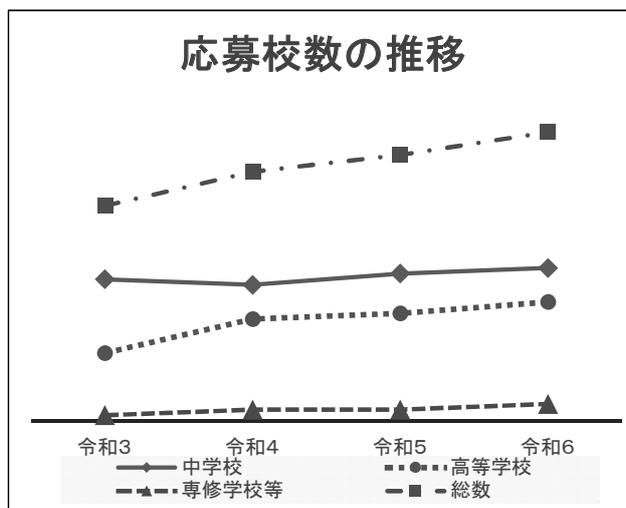
〈まとめ〉（イラストの部を除く）

番号	区分	応募校数	応募者数	入選者数
1	中学校	27	178	27
2	高等学校	21	155	23
3	専修学校	3	12	2
合計		51	345	52

応募校数・応募者数・入選者数の推移

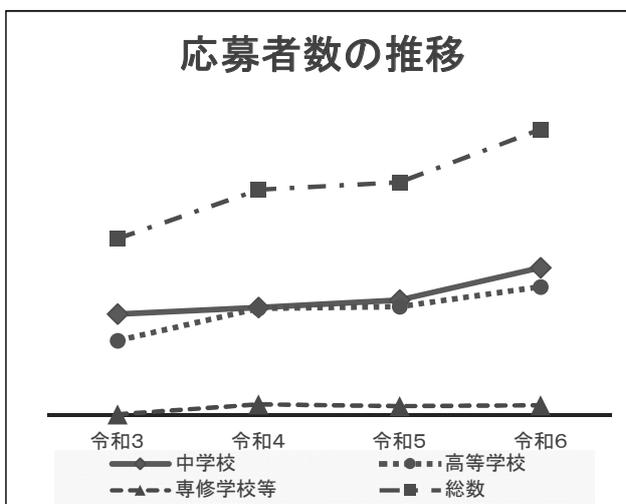
1 応募校数の推移

校種	令和3	令和4	令和5	令和6	平均
中学校	25	24	26	27	26
高等学校	12	18	19	21	18
専修学校等	1	2	2	3	2
合計	38	44	47	51	45



2 応募者数の推移

校種	令和3	令和4	令和5	令和6	平均
中学校	122	130	139	178	142
高等学校	90	129	131	155	126
専修学校等	1	13	11	12	9
合計	213	272	281	345	278



3 入選者数の推移

校種	令和3 (2021)年度			令和4 (2022)年度			令和5 (2023)年度			令和6 (2024)年度			平均 %
	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	
中学校	122	19	16	130	20	15	139	22	16	178	27	15	15
高等学校	90	14	16	129	20	16	131	20	15	155	23	15	15
専修学校等	1	1	100	13	2	15	11	2	18	12	2	17	38
合計	213	34	16	272	42	15	281	44	16	345	52	15	16

作文のテーマ別応募数の割合

①作文の内容

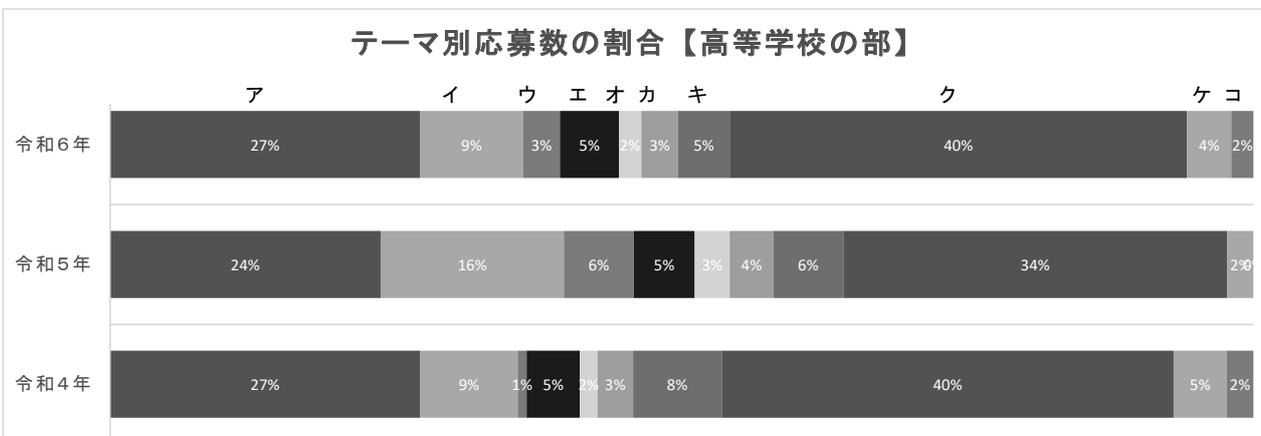
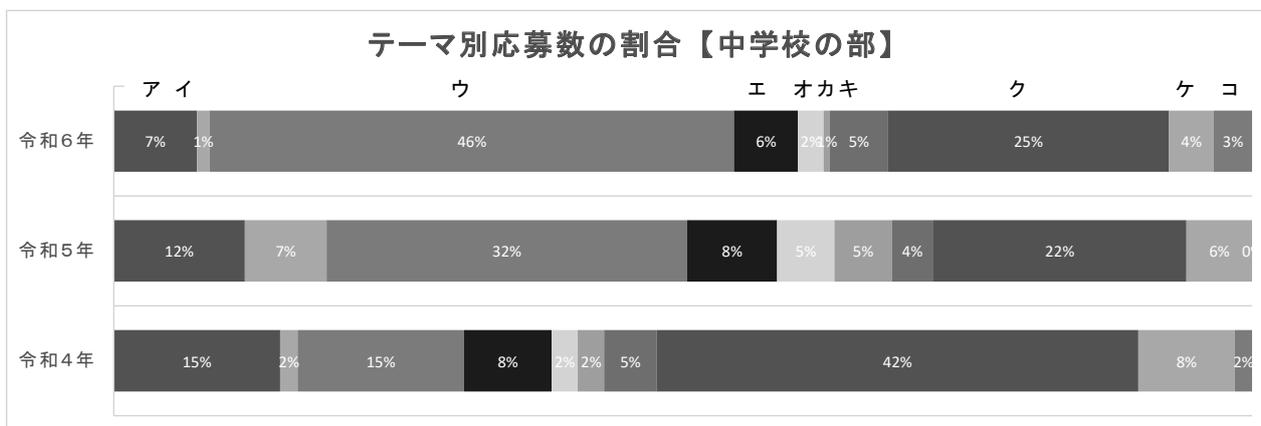
次に示す学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

- 中学校における技術・家庭科の学習
- 高等学校、専修学校、高等専門学校又は短期大学における専門教科の学習
- 勤労に関わる体験的な学習

②テーマ

作文の内容について、次のテーマ番号（ア～コ）から関係するものを選択し記述する。

- ア 授業等を通して学び得たこと
- イ インターンシップや現場実習等によって学び得たこと
- ウ 職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
- エ つくることの喜び、ものづくりの喜び
- オ 働くことの喜び
- カ 学習に対する心構え
- キ 私の生きがい
- ク 私の進路、将来の夢
- ケ 私の職業観
- コ その他（産業教育に関わる内容のもの）





令和6年度「作文コンクール」募集要項

1 趣 旨

東京都産業教育振興会の会員校である東京都内の中学校、中等教育学校、義務教育学校、高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等に在籍する生徒・学生を対象に、産業教育に関する作文の募集を通して、専門教科の学習や勤労への興味・関心や意欲を喚起し、将来の職業人の育成を図り、もって東京の産業教育の振興と発展に資する。

2 主 催

東京都産業教育振興会

3 後 援

東京商工会議所

4 作文の内容

中学校の技術・家庭科の学習もしくは高等学校や専修学校等における専門教科の学習、または勤労に関わる体験的な学習を通して経験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

【テーマ】

作文の内容について、次のテーマ番号（①～⑩）から関係するものを選択して応募票の欄に記入する。

- ①授業等を通して学び得たこと
- ②インターンシップや現場実習等によって学び得たこと
- ③職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
- ④つくることの喜び、ものづくりの喜び
- ⑤働くことの喜び
- ⑥学習に対する心構え
- ⑦私の生きがい
- ⑧私の進路、将来の夢
- ⑨私の職業観
- ⑩その他（産業教育に関わる内容のもの）

5 作文の題名

作文の内容に沿った「題名」を付ける。

6 応募資格

(1) 中学校の部

東京都内の中学校、中等教育学校の前期課程、義務教育学校の後期課程（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍する生徒

(2) 高等学校・専修学校等の部

東京都内の高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍し、専門教科・科目を履修している生徒及び学生

7 応募期限

令和6年9月13日（金）【消印有効】

8 応募方法

(1) 作成上の注意

ア 原則として所定の原稿用紙またはA4判の400字詰め原稿用紙（20字×20行・縦書き）を使用する（パソコン等で作成した原稿も可）。なお、生徒指導上の都合で、B4判400字詰め原稿用紙（20字×20行・縦書き）を使用することは可とする。

- イ 原稿用紙の1枚目右端余白に題名と氏名を書く(校名、学科名、学年等は書かない。)
- ウ 原稿の文字数は、1200字以上1600字以内とする(改行による空白は、字数に含める。字数等に過不足がある場合は選外となるので注意すること。)
- エ 原稿の欄外右下にページ数を記載する。
- オ 自筆で作品を書く場合はB以上の濃い鉛筆等を用いて、丁寧かつ鮮明に書くこと。

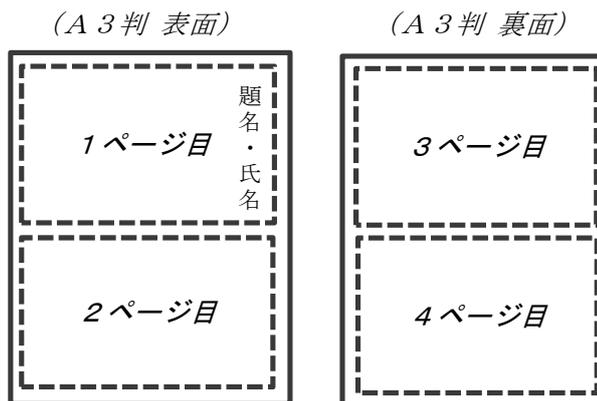
(2) 提出物

ア 作文原稿(原本)

【生徒ごとに】**1部**(原本の上に応募票を付けて、左上をステープラーで止める。)

イ 作文原稿(コピー)

【生徒ごとに】**3部**(A4判の原稿用紙を用いた場合には、順番に並べてA3判両面印刷し提出する。両面印刷ができない場合は、それぞれ左上をステープラーで止めて提出する。作文原稿にB4判を用いた場合には、必ずA4判に縮小コピーして印刷し提出すること。)



ウ 応募者一覧表

【学校全体で】**1部**(応募者は1校10名以内とする。ただし、複数の課程を有する学校(全定通併置校等)については、それぞれの課程ごとに1校の扱いとする。)

9 発表

入選者の氏名は11月中旬頃に関係学校長へ連絡する。また、入選者の作文は作文コンクール入選作品集『明日に生きる』(第35号)に掲載するとともに、東京都産業教育振興会ホームページに掲載する。

なお、入選作品の掲載に際し人権上の配慮等が必要な場合、事務局の判断において、その趣旨を損なわない範囲で字句の削除や修正等を行うことがある。

10 表彰

入選者に対して12月中旬頃に表彰式を行い、本会より賞状及び賞品を授与する。なお、選外者には参加賞を贈呈し、学校長宛てに送付する。

11 その他

- (1) 応募作文は、未発表かつオリジナルのものであること。
- (2) 盗作や不適切な引用等があった場合、審査の対象外とする。書籍やインターネット等から他者の文章を引用する場合は、引用した文章にかぎ括弧をつけて自分の文章と明確に区別したうえで、必ず出典を記載すること。
- (3) 作文中に特定の人物が登場する場合には、その方から公開に関する了解を得ておくこと。
- (4) 応募作文は返却しない。
- (5) 応募作文の著作権は、東京都産業教育振興会に帰属するものとする。
- (6) 作文中には個人名や具体的な店名、事業所名は記載せず、一般的な名称を記載するようにすること(例: ○○保育園→保育所、△△△イレブン→コンビニエンスストア)。

12 提出物の送付先及び問合せ先

〒163-8001 東京都新宿区西新宿2-8-1 都庁第二本庁舎15階北側
 教育庁都立学校教育部高等学校教育課内 東京都産業教育振興会「作文コンクール」担当
 電話 03(5320)6729

令和6年度 作文選考委員名簿 (順不同・敬称略)

中学校の部

委員長	町田市立真光寺中学校	校 長	矢島 加都美	委員長	東京都立江東商業高等学校	校 長	智片 将也
委員	台東区立駒形中学校	校 長	渡邊 和彦	委員	東京都立農産高等学校	校 長	平柳 伸幸
委員	品川区立鈴ヶ森中学校	校 長	大山 剛史	委員	東京都立橘高等学校	校 長	深澤 栄次
委員	世田谷区立三宿中学校	校 長	濱川 一彦	委員	東京都立東村山高等学校	統括校長	富川 麗子
委員	世田谷区立深沢中学校	指導教諭	黒飛 武志	委員	東京都立世田谷総合高等学校	校 長	田川 健太
委員	世田谷区立用賀中学校	校 長	毛利 慎治	委員	京華商業高等学校	教 頭	小口 浩史
委員	足立区立第十二中学校	校 長	千葉 千登勢	委員	東京実業高等学校	教 諭	木野 景子
委員	調布市立第三中学校	校 長	宇田川 裕美	委員	ハリウッド美容専門学校	学務部長	佐藤 和彦
委員	多摩市立聖ヶ丘中学校	校 長	矢野 尚子	委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	田中 智弘
委員	西東京市立田無第三中学校	校 長	大久保 順子	委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	課長代理	古川 薫
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	福住 貴夫				
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	安田 芳				

高等学校・専修学校等の部

あとがき

はじめに、令和六年度作文コンクールで入選された生徒及び学生の皆さんには、心よりお祝い申し上げます。また、作品を応募してくださった生徒や学生の皆さん、御指導いただいた先生、厳正かつ公平に審査していただいた選考委員の皆様、さらには御後援いただいた東京商工会議所の皆様には、心より感謝申し上げます。

さて、本年度の応募は、五一校三四五作品でした。昨年度よりも全体で六四作品増加し、過去最多の応募をいただきました。本年度は生成AIの進歩に対応するため、募集要項を一部改訂しましたが、大きな混乱はありませんでした。また、イラストの部は、将来への可能性と働く喜びをイメージした明るく豊かな表現力で描かれた作品が寄せられました。

なお、このたびの入選作品集を発行するにあたり、出来る限り原文を尊重して掲載していますが、人権上の配慮等が必要な場合には、その趣旨を損なわない範囲で字句を修正していますので、御了解ください。

AIの進化により情報の収集が容易になる中、自らの体験を踏まえて思考することの大切さが増しています。生徒や学生の皆さんが作文を通して自ら学ぶ意義を考え、将来の夢を実現するきっかけの場となるよう、来年度も本会の作文コンクールを実施します。会員校の皆さんから、より多くの作品が応募されることを期待しています。

結びに、この作品集が会員のみならず広く活用されることを切に願っています。

明日に生きる 第三十五号

— 作文コンクール入選作品集 —

令和七年三月一日 発行

発行 東京都産業教育振興会

〒二六三―八〇一 東京都新宿区西新宿二―八―一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電話 〇三―五三三―〇一六七二九

印刷 株式会社小葉印刷所